7369

一刀流服割興膳全

錦城齋貞玉演
梁 徹 遠 記

講談百冊之十

東京
文事堂發行

特6
673

一流一刀 瓶割典膳

錦城齋貞玉講演
藥轍速記

第一席

近頃の講談は速記者の敏腕を假りて種々講談いたしまするそれが爲め小看客諸君が贊成をあされ東京及び全國共審林に於て講談速記本が澤山發行いたしまするに付き今回武術の實傳を貞の講談速記本を發行いたしまする扨て此武術は日本の譽れに玉へ依賴されした故本日より言上いたしまするは神子上典膳瓶割の傳といふのを演じまする扨て此武術は日本の譽れにて我邦は武國といつて然るべく既に過年日清戰爭にて日本の

強國たるを萬國に披露しました付いては、撃剣といふものは必ず嗜まなければならんものであります併しそれも充分に卒業致せば宜しいが中には少しばかり覚えて俗にいふ生兵法大怪の原といふのがこれでございます扨て同業者が種々講演の決記本を出して居ります中には伊藤彌五郎の傳或は日本隨一高田又兵衛などゝいふ曖昧なことを演じて居るものがあります、日本隨一とは何のことでありませう何の隨一だか更らに分りませぬ大体標題の附方も知らずして演じまするゆゑ無論全本は曖昧が大体でありませう貞玉は武術のことは得意ではありませんが然るべき撃剣家の人に就いて種々聞及び或は其他を確かめまして今日より演じます伊藤一刀齋景久先生、彌五郎といふのはこれは俗名でありまず抑も剣道は種々ありまず先づ武藝流祖を見ますると天眞正傳神道流先づ日本にてはこれが

剣術一流の祖でありまして飯野長威齋家直といふ人が棒の手を剣術に直しましたものでありまず、これが刀術の祖であります付いては一羽流これは諸岡一羽といふ人が祖でありまして飯篠先生の高弟又神陰流といふものもあります、これには稱へが一つで文字が違ひます新影流、眞影流などゝあります神陰流の祖は上伊勢守秀綱此人は上野の住人でおざりまして此人の門下には最も澤山あります第一柳生但馬守、丸女藏人、那河彌左衛門、塚原卜傳、此卜傳流にも曖昧な速記本が澤山あります

これは餘事……又兵山孫次郎等が其高弟であります、因つてこれより山でゝト傳流といふのがあります又有馬流といふこれは有馬大和守といふのが祖でございます、それに天流これを後に改稱して天道流これは齋藤判官傳鬼といふ人が祖でございます其次に中條流、祖師は中條兵庫助長秀といふ人で

ございます、又富田流の祖は富田九郎右衛門其次に富田越後守此富田流より出でましたのが後に一刀流でございます、これは瓶割典膳の傳記本文より充分に講演します、此富田流は種々の派を擴めまして一放流これは富田一放といふ人が開いて名前を流祖おいたしました又長谷川流といふのがあります、これは長谷川寶喜といふ人がありました、此人は關白秀次公に任へまして一派を擴めそこで誰しも柳生但馬守様を柳生流と心得て居りますがこれは大ひに相違で其祖たる柳生但馬守宗嚴、此お方が祖でありまして新陰流でおざりました和州柳生の人にして菅原道眞公の後胤なり最も劍術は上泉秀綱氏より傳はりまして これが新陰流の祖でございます、それより疋田陰流といふのがムりますこれは上泉氏の門人にて四田文五郎といふ人が一派を擴めました、又心貫流といふのがありますこれも上泉氏

の高弟にして丸女藏人太夫が擴めました、そこで柳生流と申すは柳生十兵衛三嚴即ち前の柳生但馬守のお孫に當るお方でムいます、此人は何か狂氣になつて澤庵禪師が其發狂を癒したなんぞといふ曖昧な講談もありますがこれは大きに相違いたして居ります全くは御病身にして御陣屋にお引取になつたお方でムります又柳生様の御門人に庄田喜兵衛といふ人がありましたこれは庄田流といふ一派を擴めたお方で二代目但馬守宗矩公の門下でございます、茲に又小田流といふのがありますこれは小田讃岐守といふ御家人がありまして應安年中の人でムいます、それには亦神明無相東流東下野守元治といふ御人がありますこれは東國の住人此流などは手前も此武藝流祖を調べます前は存じませんでした去ればにや講談師仲間でも此流を高座で演する人はありませぬこれは鹿島香取の神宮に仕へ

ました人で一派を擴めたものであります、無明流といふが法、一つあります、併し無明流と申すると明かでない流であります から何か曖昧なやうに思はれますが此人上野の人にて北信氏康に仕へ石田伊豆守と申して最も劍術に妙を得ました茲に天心獨名流、涼天覺清流、念流、東軍流、丹石流、自源流、貫心流、二刀政名流、二天流……これは宮本武藏が擴めた流、二刀鐵人流、吉岡流、將監鞍馬流、愛州陰流、願流、諏訪流、京流、源流、民宮流、伯耆流、一傳流、眞心影流、まだ〳〵これから饒舌りまするとまだ幾ら流祖がありますか知れませぬが餘り流々と長いゆゑ此邊で止め跡にて委しく講演いたします

そも伊藤一刀齋といふ人は師、匠は鍾馗流、鍾馗自齋といふ人で前に演じて置きました富田流より出でましたものにて先づ是等を俗に人呼んで仙人といひましたもの併し世の中に仙人と

いふものはありますまい、滑稽のやうですが糸女の傳ノといふ婦人の好きな仙人がありましたが婦人の肌を見て雲から落ちたといふこれは滑稽人のお話併し今の世でありますのは盲人千人明目千人でございます……これは成程あります其中に重も盲目千人でございます扨て此の講談の主人公たる神子上典膳忠明といふ人は同門を斬りましたのは師、匠の命に依りましたのでこれに因つて武術を現はしました、これを大抵講談師が辨じまする所にては善鬼といふものを斬りましたのは紺屋の藍瓶の中に善鬼が隠れそれを神子上典膳が上段に振被り藍瓶の中に其善鬼を斬つたと申します、これらが大ひに相違いたして居ります紺屋の藍瓶といふものは諸君も御存じでせう土で固めて幾らも拵へたもの何處から斬れやう理由がムいませんこれは瓶割といふ刀を以て斬りましたもの其瓶割の刀は一刀齋

久先生が神子上典膳へ御渡しなされ、これを以て斬れと仰せられたのは武術の秘密より出でましたもの、抑々伊藤一刀齋は幼名を彌五郎といつたと申しますが或る確かなる書物を見ると幼名左五郎といつた人でムいます、それをどういふ譯か彌五郎と皆講談師が演ります、これは伊豆の韮山の御人にて、其父たるものは抑々南朝に仕へまして勤王の一人伊藤瓦明といつた人でムいます、何時の頃にか伊豆の國へ參まして土着の間僅の田地を傍らに拓いて農作に心を入れ……併し武のことは忘れません、其倅左五郎といふものは幼少より武術を好む然るところ鍾捲自齋といふ人が諸國遍歴の爲め此陲りへ參りまして一泊をしたのが縁となり倅左五郎の武術の指南を頼み入れます、左五郎も最もこれを喜び神魂を籠めてそれより武術を學び充分に修業をいたしまーした鍾捲自齋といふ人は俗にいふ偏人、人と

交際を嫌ひます、又人と俗話をいたすことを嫌ひまして中には鍾捲さんは强者かアリヤ啞ぢやないかなどゝいはれた御人でございます同氣相求むるの慣ひいつしか伊藤左五郎を以て我子のやうにお思ひなされてそれ程口數を利かぬれ方が劍道のことに付いては座つて居ても不意に肩を打ち「それ見ろさうゆふやうなことでは身が固まらぬ、ソレ斯ういたせ、アヽ致せといつて教へました、それが爲めに左五郎こと僅か七ヶ年の中に鍾捲流の極意を極めました、然るに鍾捲先生はそこを去りまして「我等はこれより日本六十餘州を經歴なさん」と人の止むるを無理に御立なされ、左五郎大層これを惜みまーした、然るに自齋先生は何れにて御果てなされましたか其行衛詳らかならずと武藏流祖錄などにも出て居ります、因つてこれに付いて確めたく種々の書物を見ましたが更に相分りません……爰で左五郎は

親にも別れまして今は獨身と相成つたるが爲め二十六才の折住慣れたる併豆の國を發足いたしてこれよりは劍道ばかりにあらず鎗の道も確めんと諸國を修業いたしまする道々劍道の道場あらばこれを訪れまして立合ひを乞ひ、又途中に於て武術者と見ると我姓名を名乘つて修業の爲めと懇望いたして立合を乞ひました、併し始めの中五ヶ年の間は一遍も勝ちません、いつの立合ひでも自分が負ける例となれば人の打込む形を見たものでございます、唯向ふを打たうといふことは決して心掛けません打込んで來るときにどう受けたら宜からう、併し各々其得意がありまして面を打つ人もあれば小手を打つ人もある、或ひは胴を拂ふ人もある千變万化でありました、これは成程良き所に心を着けました大抵勝負事は勝たうといふのが一心ですけれども此人は勝たうと思はない負けないやうにと志ざす、尤も

これは何人の申されたのでございますか

敵をたゝ打たんとばかり思ふなよ
自らもるあばらやの月

といふ歌がありまする、これはそうでムいます、勝負事は勝たうと思ふな負けないやうにしろ、角力でも無闇に勝たう勝たうと一心に思ひまするとすかられよう負はないやうと心を入れまする

筑波山はやましげやま茂れども
をもひいるにはさはらさりけり

と云ふ歌がありまする、これはたゞ一心に勝たうといふので何万の敵に向つても怯かぬといふ所謂血氣に急燥るといふこれは餘り賛成し難い歌ださうです、それは武術極意の歌……茲に伊藤左五郎氏は五年の間國々を廻つて何處へ參つても打込める

ところを打込まずして向ふの打込んで來るのを受けることを稽古いたしました、もう大抵十人二十人に會ひましても夫々相分りさしたる故其次の五ケ年は唯打込むことばかり稽古を致して以上十ケ年の中に全くの勝負を致したのは三十三度でおざいますが、これにも妙術を得ましたもの、去れば伊豆の住人であるからして宮本武藏政名が三島の宿に於て此伊藤景久に出會つたといふ、これを附會説に演ずる事がありますがこれ等は強ち悪いことではありません、伊豆の住人ですから宮本が上方に參るに付いて伊豆の三島で會つたといふのは附會はせか大層面白ろうございます、扨て此の伊藤先生は鎖捲流より出でましたが己れが段々老体となつて一刀齋と號しました時から自然と一刀流といふことを自分で擴めました、これが其の一刀流の元祖であります、尤も一刀流は種々の派があります、小野派一

刀流……これは小野二郎右衛門といふ人、又梶派……これは梶新左衛門といふ人が一派を擴めました、又飯田一刀流……これは飯田播磨といふ人が擴めました、其中に忠也派といふものがあります、此忠也派といふのは則ち伊藤先生より出でたものであります、其中に第一の高弟と謂つべきが神子上典膳忠明、其の次に古藤田勘解由左衛門俊直といふ人があります、此俊直は後に美濃國大垣の城主戸田采女正様御家來になつて此の古藤田といふ人の家があります、御一新の際よりでも正に選りましたものその後は如何なされたかそれまでは知りませぬ扨てこれが伊藤一刀齋先生の話……尤も一刀流といふ一派を擴めました位のお方でありますから中々容易ならざる苦心……それよりズット世を過ぎまして天保年間に千葉周作といふ先生がありますこれは北心一刀流、北心妙見を信仰して一派の中に

一つの妙手を考へた、この北心を頭に附けなければならぬといふのはこれは武藝群倫、武藝流祖錄にも別段見へませぬ、尤も中興では御名人でありましたさうでございます、斯ういふ譯ですから劒術は唯一刀流或ひは柳流、新影流とのみ思ひまするが種々に流儀がありました、其流の中にて一つの流を擴めたる位なのは中々容易ならぬ苦心、日本人は物を捲きまして少しばかりして、これは出來あいといふて捨てゝ仕舞ふ、これは所謂自分に忍耐がないのでムいます、西洋人は斯ういふことは祖父さんの代に考へますればそれを成就しなければならぬと孫、曾孫、やしやごに至るまで到頭ことを爲し遂げるといふことがあります それですから其原を考へまするは中々容易ならんこと、去れば一刀流と米だに婦女子まで劒道の一流を聽及んで居ります、其流祖たる伊藤景久先生は容易ならん苦心、併し唯瓶割がお待兼

れでありまするに因つて其の瓶割の主人公たる神子上典膳忠明のお話にこれより移ります、これまでは何か口上のやうで御退屈でありませうが、これ丈けことを演ずて置きませんと末に至つて種々千變万化を致すと武術のれ話に必要のところでありまするから斯く長々と申上げました御退屈樣、これより神子上典膳忠明の艱難辛苦のお話から彼の善鬼を斬つて功名を現はす瓶割のお話を次回から委しく演じます

第二席

そも伊藤一刀齋景久先生は前回にもいふ通り鍾捲自齋氏に學んで鍾捲流の極意を極め其原たるや富田流でありまず、餘り古ことから饒舌ると長くなりますからこれで止め置きます、自ら伊藤一刀齋と名乘り一刀流の一派を擴め全國に著名たる撃劍家と三十三度の立會でございます、尤も幼少の折からして充分

の腕前、此の人力は四人を兼備いたして居ります、能く講談師が岩見重太郎は千人力、佐野鹿造が二十人力あつたの又い角力取雷電爲右衛門が十人力あつたのといひます、併しこれは言葉の花で斯く申したのでせう、中々人間一人一て其やうな力のあるべきものではない、四人力が止まりださうでムいます、去れば一や剣道の極意も卍字切返しの法といふのがあります、これは一人して四人に向ひましたとき敵を前後左右に斬つて仕舞ふといふこれが止まりでムいます、去れば一人で四人を相手にするは此上もないものとしてあります、尤も十人の中に飛込んで立合ひをした、百人の中にて立合つた、一人死を定めるとさは十人これも敵し難く、十人死を定むるときは百人これに敵し難いといふことがありますこれは唯だ死を決すれば物が怖くないといふ意味でせう、去れば今いふ通り卍字切返しの法は四人を

斬りまするもの、人間の力は四人といへば大したものでムいます、伊藤一刀齋は伊豆に生れましてそれより諸國修業においでなされたれ方、そこで剣術ばかりではない鎗の道も充分になされたけれども剣道の方が一階上手ださうでムいます、或時武藏に於いでなさいまして茲に武藏の國今は東京其の前は江戸と申しました、此の武藏の原にお城を拵へ呉れましたのが太田道灌持資入道といひまして、日本の大勢は此の武藏でなければいかんといふ、そこで今の西丸只今では皇居と相成つて居ります、彼處に先づ城を築かんといふので石垣を組みまして一時居城を拵へたさうで、これは江戸名所圖繪には左まで委しく出て居りませぬが武藏名寵といふ書に出て居ります、この時道灌か

我庵は松原つゝき海近く
富士の高根を軒端にぞ見る

と呟トました所、或る夕景……唯今で考へますると品川を少し過ぎて高輪あたりのところでもムいませうか一刀齋先生がブラ〳〵と參りますると バラ〳〵駈出して來るものがあります 一刀齋「町人何である町人「へエ今彼處に大きな侍ひが刀を拔いて往來の人を見ると斬付けて居ります、何れ追剣でもムいませうが、もうそれを見ましたから驚いて私しは逃げて參りました」すると又一人駈出して來てアヽ危ぶねい〳〵あの侍えは餘程強えなア今飛蒐つて兩人のお侍えを叩き倒して仕舞つた」それを聽いた一刀齋先生が「ハヽア兩人の侍ひを斬つて仕舞つたのか

○「なに斬りやアしませぬ刀の峰を返して打ちました」二「さうか

○「お前さん危ぶのふどざいます、そんな所まおいでなさるといふと……」「よし〳〵それでは行つて見やうか」○「危ぶのうでございます」悠々と

ておいでなさると「待て」と聲を掛けた景久先生「何んである」●「汝は手前がこれに居ることを知らぬか、知つて來たのか知らずに來たのか」二「イヤ今お前の爲めに脅やかされ逃去つて來たものが兩人バかりある、それから聞いて來た」●「聞いて來たとは面白いサア立會ひをしろ、汝は何といふ奴だ」二「アヽ俺か、姓名を問ふならお前の名いはつしやい」●「アムして見れば其方はなんだな乃公の顏を知らんと見へるな」二「汝如きものは知らぬ」●「ハヽア左樣か」此侍ひが大音揚げ「如何に聽け吾こそは出羽國羽黑山の邊りに住つて居る、劍道は生れながらにして其妙を得日本六十餘州の中に恐るゝもの一人もなし、古藤田勘解由左衛門俊直といふものだ」二「ホヽオ大層長い名前ぢやな」●「エヽ人を馬鹿にたゝ居る奴ぢや併し物取りをしたり追剝をする者ぢやアない唯、劍道の腕試しにやくのぢや、お前乃公に向へるなら充分向ふ

て見ろ、併し恐入つたといつて降參をしたら逃してやる事さ眞劍で參れば眞劍で立會ふ、組打なら組打で立會ふ」一刀齋莞爾々とお笑ひなされ」「ハヽア左樣かお前日本一人か」●左樣」「左樣であらう古藤田勘解由左衛門といふ名前は一人であらう併し日本にお前位な劍道者は澤山ある、餘り威張るものではない」古「エヽ面倒なことをいふ奴ぢや」言ひさま刀の柄に手を掛ける間もなく引拔いてエイと斬込んで來るのを閃然体を變はした一刀齋刀の柄に手を掛けたが、併し成るべく刀を拔かずして斯ういふものは取押へたいけれども向ふはどの位の腕前だか分らぬ閃然〳〵体を變はす中エイヤと斬込んで來る刃先、誠に景久先生感心をした」「出來るな其方は」古「已れ人を馬鹿にして居ると氣を焦燥つて右を拂へば左に避け、左に斬込めば右に避けて前後左右の嫌ひなく滅多打に斬込むを此方は飛び、彼方に

避ける其中勘解由左衛門エヽ面倒なと振被つた一刀ヤツといふ掛聲と共にアハヤ一刀齋は脳上からズバッと斬下けられたと思ひの外、虚空を打つて勘解由左衛門跟蹌めく所をエイと突かれ尻餅突いて倒れたればそれへ來つて一刀齋が兩手を取つて引きましたれば、俊直慌ろいて許して玉はれ恐れ入つた」「ヘヱ本音を吹いたな」古「何と仰らるゝ先生であるか誠に以て感心な致した日本に左ほまでの先生のあるとは存ぜぬ願はくは御尊名を承まはりたい私しは斯かるふとを致すも全くは劍道の執心表には狂氣と見せ其の實は狂氣にあらず去れば人の命を取るにあらず只だ腕を試さんが爲め斯く致した、許して玉はれよ」段々詫をしたゝ俊は伊豆の伊藤ぢや」古「ナニ伊豆の伊藤とは……」「一刀齋ぢや……景久ぢや」古「ハヽア恐入り

奉つりたり扨ては伊藤大先生であらせらるゝか實は拙者未だ伊藤先生の尊顔は拜せず御腕前は分らず斯く諸國修業をおし先づ大抵ふものと立會ひをして、もうゐれならといふ時に至つて劍道の神様ともいふべき景久先生に就て極意を極めんと修業中の腕試し許して玉はれ先生、して先生にはゐれより何處に一「去れば ゐれより武藏を過ぎて上總下總房州又は常陸少し東を廻はる積りで參つた」 古「願はくば先生吾を門下に加へ下さらば忝けなしゐれより は先生のお草履を攝み又は肩を揉みお御足を撫つても犬馬の勞を盡したし何卒吾をお連れ下こる譯には相成りますまいや」 一「ア、其し〳〵 さういふゐとあらは吾と共に此國を離れ上總の國の方まで參るやう……」 古「喊に以て忝けなし」と師弟の緣をゐゝで堅めるゐれ所謂同氣相求むるので、伊藤先生は先刻勘解由左衛門が斬込んだ其太刀先の早

さ吾なればゐう是れを受けたが大抵のものはゐれを受け申誠に以て感心と甚くお譽めなつた爰にて古藤田勘解由が覺に伊藤先生の弟子とふつて其の夜は近所の茅屋に一泊なし麥飯に芋の煮たの位で夕飯を喫し翌の朝になりますると四方を見れば銀世界昨夜からの雪にして寒さは寒し 古「先生今日も此家に一泊いたしませう」 一「左樣ぢや此の雪の中を出ても仕方がない、然らば茲に今一泊……」宿の老爺が「お侍ひ樣別に御馳走はございませぬが今日は最う此の雪ではお出立遊ばすゐとは出來ますまい最う一日お泊まり遊ばしまし、斯ういふ雪のときは何より暖かいのが御馳走唯今ゐれに粗朶を焚べます」健々しく も親爺の待遇、其の昔(佐野の渡り伏見の里)に佐野常世が最妙寺時頼に鉢の木を切つて御馳走したといふも斯くやと思ふばかり總爺の心を喜んでおいでなさる中に居爐裡の火がブウ〳〵

と烟むり出しました、折しも老爺は外へ出まして明日の仕事に
拳く草鞋ドン〳〵鎚を叩いて居る　一「おれ〳〵　勘解由大廚烟
むつて居るさうぢや其處の火吹竹で早う吹け」　古「畏まりました」斯うなれば師匠には子の如く扱はれても仕方がない、古藤田
は其處に在つた太い火吹竹を持ましてプウ……　一「エイ」古「
アッ痛い先生あれは何をなさいます」　一「こりや〳〵お前はろ
れではまだ〳〵一刀齋に就いて修業は出來ぬぞお前が唯だ火の
を吹くときに早う此の火を焚けばくれば宜いと吹竹に心を入れ
て向ふを見て吹いて居るろれは武術に適はぬぞ」　古「あれは
ふの火ばかり眺めて居るろれでは眼の配りは向
恐入りました」　一「人間は眼といふものが大事だ此の家ぢやか
ら宜しいが若しも此の火の中に何にかあつて刎ね若し眼でも
潰したら何とする一眼は眼つて一眼を開いて吹け同眼を開い

て吹くは甚だ宜くない眼は正副なり左があれば右は要らぬ右
があれば左は要らぬと斯う思はなければいかぬだよ」　古「恐入
りました」うゑで亦御飯になる、御飯を喰べるとき箸を取上げ椀
を取つて食さんとするとき伊藤先生が「エイ」といふバッタリ箸
を取落した」　古「あれは先生痛いみとをおさる」　一「ろれ見ろろ
れが悪い飯を喰ふときに早く滿腹せんとのみ思ふて箸を取る
ろれは宜しくない第一飯を食するを見て居ればまだお前は若
いから無闇に腹の中に飯を入れるといふ其の心得ではいかん
齒といふものもあり舌三寸といふものもあつてあれを味ふ碌
々飯を噛まずしてグイと呑込んではいかん齒は即ち物の受付
なり一應其の受次ぐ所に於てあれを取次ぎさうして順序を以
て我が腹へ入れんければ食したものが却て己れの身体に毒に
なる宜いか」　古「恐入ります」ちよつとしたお話ですが先づ斯う

いふ工合……うれですから唯だ劍術の稽古といつて竹刀木刀を以てポカ〳〵打つて居るばかりではいけません平生の心掛けにあるゝと斯くいたして此の家に居りまする、又もや翌る日も降出して三日ばかりといふものは大雪でございます、近頃は此東京も大層雪が少くなりまして既に此の一両年前などは一遍も雪を見たゝことがない其の昔武藏野原といつた時分は隨分雪が降りましたもの……どういふ理由であらう昔たんと降つた雪が近年降らんのはと成人に問ひましたら其の人がいふには其の土地に自然と人家が立ち人口が殖るとゝもう澤山雪は降らんものであるといふ併し斯う申すと究理學の講釋をするやうでございますから止め置きます、うれが爲めに此の老爺の家に六日ばかり泊つて居ります、或る夜のゝことでございます老爺と三人話をしながらホンの澁茶を温めて飲んで居りますると

庵の表を訪問る丶者がある　○「庵主は居らぬか雪のために難儀をいたす樣側の隅でも苦しうない一泊を所望いたす庵主は居らんか」と二聲三聲老爺さんが「ハイ〳〵唯今明けます何誰樣でございます」　○「手前は武術修業人何分にも此の邊り人家少なく宿る所もおしどうの一泊乞いたきものの食するものは見ればいらぬ辨當は用意してあれば唯だ此の雪を凌がして貰いたい爺「ハイ〳〵」此の爺さん親切なものと見へて　爺「ア丶左樣でございますかイヤ他の家には此の二三日あとから劍術の先生方が泊つてゐいでなさるに依つて丁度お宜しうございます御馳走はおざいませぬが麥飯位なら差上げます此方へお昇りなさいませ」　○「ナニ劍術遣ひ泊つて居ると……ハ丶アさうか少し位木刀でもひねくる奴か……何人居ると二人居るか……ハ丶アさうか」聽くと勘解由左衛門が「まだ年若お修業者、生意氣なゝ

とをいふ」と表に駈出さうとするから伊藤先生が「默て居れ〳〵ア、面白い〳〵」袖振り合ふも他生の縁、顧く石も縁の端とやら此方へか昇りしてお名前は何といはるゝな」○「ナニ名前を聽きたい乃公の名前を聽いて慄くな吾は日本六十餘州の中剣術遣ひも餘多あるが先づ乃公に及ぶものは一人もない」聽くよりも解由はプッと吹出して「オヤ〳〵天狗の集りだ」老爺がおれを聽いて若し間違ひでも起りはせぬかと心配をしながら　爺「しておお名前は」○「大池源太左衛門といふものだ」爺「ハヽア左樣でござりますか先づ〳〵此方にお通ほりあされませ」大「御免」爺「お草鞋を」大「よしよし雪の中ゆゑうんなに汚れては居らぬ何か拭ふものを貸して呉れ」其處にある布を持つて來るとうれにて足を拭ひ通入つて來たときに左の手に提げて來た刀を見ると彼是六尺もあらうかと思ふばかりッカ〳〵と通入つて來

て　大「オヽ、寒い〳〵」老爺「當らして呉れ」爺「ハイ〳〵うれへお當りなさいませ御兩人方又お客樣がおいでなさいました」一刀齋先生は莞爾〳〵笑ひながら向ふ斯うおいでなさる、此方に勘解由が居ります其の眞中に通入づて挨拶もなく　大「アヽ、寒いと胡座を掻きましたるも武士が其處に突然胡座を掻くなとは無禮な譯でございます、一刀齋先生は最う大人でございますから何をするかと思つて居ります三人挨拶もせず顔見合せて居ります中餘り其の人が一人で莖つて居りますから老爺がうれへ參りまして「若し〳〵唯今おいでのお武家樣最う此の雪でございのさするが私しの家は若被りをするものとて少くうれに此のお兩人樣は二三日雪に降込められて御逗留夜中と雖も寢られません今夜は一ト晩唯た御馳走は居炉裡の火、貴方がお一人でさう最中においでなされては兩人のお方は當られま

せん何うぞお氣の毒ながら最うつとお御足を……」大「エヽ默れ老爺今日手前は雪に難義をいたし宿の無心を聽入れたればよそ此居燈裡に暖つて居るに手前が這入り參つたも此の若い奴等兩人は先刻から暖まり居るに手前が這入り參つたも此の若い奴まで挨拶もなく無禮な奴だ地り象ねて勘解由左衛門が「默れ侍ひ……老爺はあれは大變だ喧嘩でも出來やアしないかと先生の方を見ると景久先生莞爾〳〵笑つて當つてゐないでおさる」大「默れ侍ひとは何んだ」古「手前は何んだ」大「乃公武術修業のため諸國遍歷をする劍術遣ひだ」古「何んのかのと少しは木刀をひねくるか」大「あれは無禮なあとをいふ汝も少しのひねくるか」古「オヽひねくる」大「名前は何んといふ」古「拙者は二三日跡より此の家に居つて言はゞ古參のもの手前は今來たれば新參者、新參から古參に姓名を名乘つて禮義をするが當り前汝の名前をなぜ言は

ん」大「乃公は大池源左衛門といふものだ、して又汝の名は」古「乃公は古藤田勘解由左衛門俊直といふもんだ」大「それぢやアなぜ此の近邊で往來人を捕まへては投げ何ぢやアをいか此の間中此の近邊で往來人を捕まへては投げ或は往來人を挑んで腕を固めた奴だな、實はさういふやつに出遇ひたいと態々尋ね參つたが何分雪の中にてうんなものも見當らず殘念に思ふた所、此所で會ふたは盲龜の浮古だ」古「ウム面白い幸ひ此の軒下に雪明り一本立會ひを致さうか」大「可し面白し〳〵」うれといはずに先生に伺がふ樣子一刀齋は莞爾〳〵笑ひ結構〳〵若いの兩人確乎やれ」大「何んと此の老爺無禮な奴だ一休汝は何んだ」一「俺も此の家に泊まつたものマアー立會ひをさつしやい」然らばといふ中に勘解由は木刀取つてうれに參りまする、大池源太左衛門も心得たりと持つて來た木劍取るより早く庭前へ出まする……庭前といつた所がホン

の瀬戸際降り來る雪は益々激しく四面は一面銀世界、サア來いと搗へ込む、尤も竹刀はまだ充分に用ひませぬ時分木劍でございます、併し搗釋伸伸間の惡口ではありません……素面素小手の木劍の立會ひにエイと向ふを打つたといひます決して向ふを打つものではないさうでございます眞玉はあれは心得て口演で居りまして然るべき先生に就いてあれを尋ねましたから決してうんなふとは申しません、木劍で打てば必ず怪我をするか或は打ち所に依つては殺されて仕舞ひます木刀は則ガタ……双方搗へてヤッ、エイ、ヤッ、オ、ハッ、エイと掛聲をして受太刀と打込む太刀と合はしたカタといふもの、うゐで後に向ふを打つても宜いといふやうになつたのは袋竹刀と申して細き竹を何んも入れずに袋を被せてあります、あれで打てば痛いあとは

痛いが怪我はいたしません、うれをも一層略して並の竹刀といふものを拵へうれから面、小手、胴を着けて立會ひを始めたものでございます其中に段々一刀流も意氣になつて柔術に使ふやうになり目晴、縞ふどをメッカリと刺込んだヒブといふて前に當ます金其の裏は朱塗、雨手も短かくなりまして皮胴を着け垂と申しますのも小さなもので「ふ小手」と唯だ竹刀の先が尼ふに當れば痛くおくてもあれを勝と云やうになる段々形容になつた其の中にも直心影の道具は誠に不意氣でございます充分打つまでやるんですから面の蒲團も厚く或は小手も二の腕まで充分掛かるやうにおりました併しあれは劍術道具のお話……双方庭に出る老爺も固より劍術道ひが來ると喜んで泊める位わ、爺さんですから大喜びであれを見て居ります中にヤッエイと双方木劍を取つて立上る其中に古藤田勘解由が

ポン〳〵と打込んで來た源太左衛門受太刀と相成つて「ヤーエイ」と受ける又打込んで來る凡そ五六たび台せましたが皆な大池に受けらるゝ少し焦燥つて勘解由左衛門が「ヤッ〳〵〳〵」といふ聲と共にポンと打込んだとラリ体を躱はして大池が手許の方へポン〳〵と打込んで來る今度は俊直が受太刀となつて「ヤッエイ、ヤッ〳〵〳〵エイ」再び打込む太刀互ひに千變万化を尽して居る中に稍々暫くの間の立會ひ……お面などを決して打つのではありません唯だ打込むのを受ける、受けるのを唯だ打込みいたして一時餘りの立會ひに双方勞れて仕舞ひました、大池が感じて「若いの成程あれぢやア往來人を捕まへて立會ひを所望するといふ丈けの腕乃公にも今分つた成心〳〵中々若いのやり居るはい」勘解由は大きに殘念がつて「無禮な一言」あれを見て居た一刀齋が「あれ大池さんとやら中々〳〵出來るなぢやがお

前は此方の者を年若と見て少し侮る樣子ぢりやアいかん〳〵決して侮るものではない侮るものは必ず負けるといふ何とあれば此の者が打込んで來るのを受太刀するは充分宜かつたが打込むときに何んとおく木劒の先に殺氣を現はし此方が受け損じなば腦骨も碎くる有樣あれが所謂血氣に焦燥るといふものまだいかんぞ」大「何んた老人猪口才なあとをいふ奴ぢやな此の大池がいかぬと……然らば汝と立會つてやらう」此の時勘解由がアイヤ源太左衛門待つたあれあろ併豆の一刀齋先生だと言はんとしたが一番あとで態かしてやらん何とでもしろと控へて居る」と一「ハヽア俺は迚も立會はれん」大「立會はれんものなら何故ろんな高慢なあとをいふ景久先生少し体屈をしたと見へ「ろれでは一本立會はふかな」大「ソレ立會つ」一「サア打つて來いよ」と短き木刀をヒタリと拂へた、大池焦燥つて打込む太

刀をポン〳〵と受流して　一「ヤーエイ」と一刀齋が氣合を掛けるとバラ〳〵と跡に下つて木劍をうれへ投出し恐入た扨は先刻より失禮の段々平にお許し下されかし御身は景久大先生にてはござらぬか」　一「ハヽア名が分たか如何にも一刀齋だ古藤田がおれを見て居たが「ソラ見たゐとか何だ大池乃公も此伊藤先生の爲に前い同樣な目ゐ逢た併し今立會ひの最中に木劍をうれへ投棄て參つたといつて景久先生ではござらぬかとは誠に恐入た　大「うも先生のヤッといふ掛聲ゐれ全國に先生御一人其氣會ひゐう其の始めは富田流而して後に自齋先生の一派を擴めた鐘捲の極意」　一「ウム中々ゐ前はいひ居るなヤッといふ氣合鐘捲流とは能く見出た、して少し其方も學しか」　大「去ばにや私しの親といへるは矢張り鐘捲先生に仕て鐘捲流の極意を極んとして不幸にも病死いたしました」　一「名前は何と

申されるな」　大「山崎眞齋と申しました」　一「ア、左樣かうれで大「如何にも山崎を名乘らゐして大は其方の大池とは變名か」　池と手前が勝手に姓を附け國々を廻つて遠れ奥儀を究めたきゐみ然るに常々我父存命の折伊藤といへる先生ありとのゐとうれ故に私しは彼方此方を遍歷し腕を充分定めし上伊豆を訪問れ景久先生の門下に入らんと種々樣々の艱難辛苦も唯だ先生の御門下に加はりたき爲め」と長い物語り聞いて居た勘解由衛門が「オヤ〳〵」と乃公と同じゐとだ」先生は莞爾り〳〵と笑ひながら良き兩名の弟子が出來たとゐ喜び愛で又一日泊り、大した路銀の用意もおいが景久先生、勘解由左衛門、うれに大地の三人ゐ少しの錢を老爺に與へゐれより直ぐ樣上總國に乘込まんと武藏を立つて下總ゐを離れて下總國、計らゐも此の講談の主人公となるべき御神上典繕に對面をする一と條ゐれからが

此の講談の眼目聡かずんはあるべからざるの講談は次回に委しく演じます

第三席

茲に上總の國に東金といふ所があります、ゐれは日本でも高名な場所舊年貞玉も東金へ營業の爲め參りましたが唯だ眞直ぐに長い町、ゐれは餘事ではありまするが東金の茂右衛門といふものがあつて此の茂右衛門があつたが爲めに東金が益々諸方に名高くなりました、又東金に居たが爲めに茂右衛門の名前が擴まりました、引事ではないが少々お話をいたします、此の東金あ茂右衛門と申する酒造家があります、此の東金分にも好い酒が出來ません年々酒を腐らしては損をするゐと凡そ二代ばかり、然るに三代目の茂右衛門といふものが考へ出ましし、がゐれは迚ても當所の水で酒を造つても名酒は出來ゐ

い左すれは營業の損になると或時家中の酒造道具を賣拂ひまして金子百二十兩程用意を致して摂津の灘及び尾張の知多郡近所へ酒を買出しに參りました、向ふから一時送つて貰ひゐれを己れの家で造つた酒として當國に擂めれば宜らうと、所謂唯今でいへばにの商法です、純粹の商法ではありません、ゐで灘へ參り金を充分に拂ひ灘の極く良い酒を五十樽而して船がでざいませんから灘にて豊永丸といふ船、其名前に惚まして、向ふ百日間借切ました、所が土地の人々はあの船で以て大海へ出りやア危ぶないと留るものもありましたが何うゐるものか一六勝負彼の紀文大盡ではないが旨く行けば宜道損へば仕方がないと諦めてゐゐで船頭水夫等を四人といふものを雇ましてゐれとても何れも命はいらんといふので、ゐゐで灘の酒を五十樽積込み出帆いたして都合好尾張國知多へ參りました、茲で亦五

十樽を買込み以上百樽としまして、此の時に帆へ着けました印は門樽へに東の字を書きました、所謂東金の印だから人呼んであれは茂右衛門ではない茂右衛門だといふ人がありました此の人が愈々知多出帆の折は誠に晴天にして波風もなく、段々よりよりまして参りまする之は如何に遠江七十五里の灘に掛りまする と難風に出會ひましたが唯今は遠江灘は四日市通ひの蒸氣に乗りましても又たは神戸へ参る船でも誠に靜でございますが其の昔し遠州灘と申すと人が實に恐ろしがりましたもの、扨て風といふものでありまして七日七夜といふものは暴て〳〵暴れ通しした船を踏へ返すゝとも出來ませもう仕方がないといふので其の總帆を卸ろした所が仕方がない、どうで行當りばつたり龍宮の底まで行くか知れないと中の酒をドン〳〵出して風の間に〳〵波の唄〳〵船を自由にして吹通した十七日の間の風に

……風といふものは昨日は東今日は西北風南風といつて代はるもの到頭十九日目に東金の近傍の海岸に船が着きました船頭を始め一同は活ける心地はございませんが運あつて到頭着き大層喜びそこで十一日の間に飲んだと雖も十樽は飲めません漸々一駄に手が附いた位ひ、所が當時は上總界隅誠に酒が拂拂て高い所に茂右衛門が買つて來た酒を賣るヤア大層賣れ出した旨い酒だ〳〵とこれが評判になつて賣れました、これで大層な金儲けをしたる然るに此の十七日の間の難風其の中を一日も帆を卸ろさずに來たといふのでこれが爲めに難船をするものもあり沈沒をするものもありましたが其の中に門樽へに東といふ字の印しあれば帆も卸さずに行つたといふこれは何處の船だを船頭の一人が言へばあれは上總の東金の茂右衛門さんのだ知らいものではないかといふ評判中には茂右衛門さんの

印しの附いた帆を揚げるときは如何なる難風と雖も間違ひがない、何時の程かよれを言出しまする、それ故難風に出會ひますると俄に墨を持つて門搏へに東の字を書いて其の帆を卸ろさすに行くと不思議なるかな沈没しないといふよれは人間の氣の故か又茂右衛門の運の好いのかよれが評判になつた、すると日本後日になつて諸國の津々浦々で此の印しの附いた船を船頭仲間では知つて居るが中には知らんものがあります「あの印しが亦來た」「又あの印しの船が來た」「あれは何處だ」「上總の東金の茂右衛門イヤ茂右衛門の船だ大層大きい船ではないか」「俺は去年長崎で見た」「俺は此の間越後の新潟で見た九州で見た、仙臺で見た何處で見たといふので大評判になりつて見れば日本國中何處にも此の船の印しのない所はない位ぬ、れ故に此の茂右衛門の名が充分に賞れます然るにうれ丈け大家でございます、サア斯ういふ譯で東金は名高うおざいます、併し是等のお話をすると餘事のやうでございますが斯ういふ所から明べなければ大体講談であります

先づ劍道者が東國へ來ると武藏を過ぎて下總に這入るといふが下總には左までの劍術遣ひは居りませぬ、上總の東金には何れも大昔から豪士があつて劍術を悉とく嗜むといふ、うれをふ聽きになつて伊藤先生古藤田勘解由左衛門に積いて大池源太左衛門兩名を從へて武藏を立つて下總、間もなく來たる上總の國東金に參りましたのが丁度夕景、向ふに一軒の立場がございます

主茂右衛門といふ人は何にか牛込近所に來て其の日稼ぎをして居るといふよ……よれは眞玉舊年東金へ參り然るべき書物を見又は當時の人に就いてよれを聽きました實際でございます、サア斯ういふ譯で東金は名高うおざいます、併し是等のお話をすると餘事のやうでございますが斯ういふ所から明べなければ大体講談であります

先づ劍道者が東國へ來ると武藏を過ぎて下總に這入るといふが下總には左までの劍術遣ひは居りませぬ、上總の東金には何れも大昔から豪士があつて劍術を悉とく嗜むといふ、うれをふ聽きになつて伊藤先生古藤田勘解由左衛門に積いて大池源太左衛門兩名を從へて武藏を立つて下總、間もなく來たる上總の國東金に參りましたのが丁度夕景、向ふに一軒の立場がございい

ました、三人うれへ通入ると老爺が「入らつしやいまし」一「お老爺さんお酒があるかれ」老「ハイ〳〵ございますか生憎もう濁酒ばかりでございまして清酒はございませんが宜しうございますか」一「アヽ結構〳〵うれを貰げてお呉れ」老「ハイ〳〵」三人話をしながら飲んで居ると其の前の所を木刀又は袋竹刀などを持つて三四人通り掛りました　一「爺さんや」老「ハイ」一「此の近所に剣術遣ひでもあるかの」老「ハイ〳〵豪いお方がございます、何でございます此の村の庄屋様が伊勢の大神宮様に參詣をしました其の歸りに宮川といふ所で災難に逢ひまして既に命を落す所を剣術の修行人まだお年のお若いお方でございますが其處を通掛つて其の庄屋の久太夫さんをお助あさいました其の時其のお方にお約束をしたと見へてツイ此間態々這ねておいでなさいましてうれから久太夫さんが結構な先生が

尋て來て下すつた此のお方を當分俺の家に置て此の東金は曙か上總一國を皆な剣術遣ひにしたいといふので此久太夫さんはお金が澤山ございますから先生を尊敬しましてうゑでお庭が廣うございますに依つて其のお庭に警古場のやうなものがツイ二三日後に出來上りました、尤も稽古場の出來ません中から豪家の息子さん達や在郷の兄さん達が毎日稽古をして居りましたが誠に豪いもんでございます、先づ何でございませう村の人がいふには是れは牛若丸の生れ代りだらう年若なのに感心なものだあれは神様だ〳〵と尊敬して居りますうれが爲めに俺が家の孫野郎も弟子入りをしまして今朝も今朝とて粗忽をしましたから俺が叱言をいふとヒョイと振返つて私を睨んだ顔おぞは俺の間の稽古でも誠に感心なものでございます」頭り老爺が褒めて居る、大池源太左衛門クスリと笑つて「ハヽア

さうか何んといふ名前だ」　老「左樣でございますヨハイ、御名字は何んでございます妙な御名字で……伊勢は天照皇太神宮樣……駿河は富士の千軒屋出羽の國では羽黑山越中立山……河内の國で金剛山……」　大「何んだ爺さん越後の神子寄せでもするやうではないか」　老「うれで思ひ出しました神の子の上と書きましたうれで此の人は神樣より上に立ち人に逸ひおいとうれから俺が庄屋樣に行きまして何んといふお名前だと聞きましたら神子上だと仰しやいました、うれから終ひは何といふのでございますといふとあれは典膳といふお方……ハヽアうれちやア天然白然と强いのですなと申しましたら洒落を言つてはいかんと庄屋樣に言はれましたが其の劍術といつたら何でも無手勝流、鞍馬山流を學んで其の早いあと天狗の如し……大「中々老爺能く饒舌るなハヽア左樣か」　老「お前さん達鉄術の

稽古をなさるなら神子上さん所お行つて少し教へてお貰ひなさいまし」　古「無禮ふあとをいふな」勘解由右衛門が怒るから一刀齋先生が「アヽ斯ャ〳〵怒るな〳〵　年若にして遠い國から遙〳〵此處まで來たといふは感心なものだドリャ〳〵行て見やうか併しさういふ所に參るなら折角村の者に尊敬されて劍術を教へて居やうといふ其の中に慾じなあとをしてはいかんから痛〳〵　兩人「イエ何に先生少しお待ち下さい……斯や〳〵老爺其處へ案内して呉れ」　老「ハイ〳〵　往てお稽古なさいましお俺が若先生へ願つて上げませう」　大「獸れ老爺先刻から無禮なあとを申し居る神子でも亟女てもうんなあとは何ても宜」「マア〳〵何しろお危ふございます　老「婆アどんャ乃公ア一寸庄屋さんの若先生の所に行て來る　婆「アヽ行ていでなさい」　老「若爺樣御一緒に行きますかお景久がイ

ヤ〳〵俺は剣術などは知ん今両人が行て修行をして來とかいふから爺さん案内をしてやつて呉れ俺は此處で寐て居るから婆さん其の枕を貸てお呉れ」婆「ハイ〳〵此の箱でございます　か宜しうございます」一「血氣に焦燥は匹夫の勇ぢや益ないぞとを致すなよ」とあゝで両人を教訓をされ、こちらは古藤田、大池の両人が此老爺に案内されまして行て見ると庄屋久太夫の庭ヤア〳〵ボン〳〵ヤアエイ」といふ掛聲表にい一杯の群集、また八ッ少々過の刻限、此の時茶屋の爺さんが駆込みまして「若し〳〵庄屋さま」久「ハイ何ぢやい」老「今俺の立場に大層天狗な剣術遣ひが來ました三人連でございまするが一人の爺様は俺が家に寐て居りますが両人茲に參ましたが俺が此お神子様の……久「なんだお神子とは」老「イエサ神子上様のことを譽ますと何んだかクス〳〵苦笑ひをして大分悪口をいひますから茲に連れ

て參りましたソラ宜いか先生怪しい修業人が參つたぞ」聞くより典膳まだ年若きあとでございますから「何んといふ奴が來たか老「何んでも武藏の國とか伊勢の國とか日本一の剣術遣ひ一人は古田勘助とか一人は小池源太郎とかいふ何だか名も知れない奴でございます神子上は一刀齋の弟子古藤田勘解由大池源太左衛門とは知ませんから」神「ふちらへお通し申せ」事了寧に挨拶斯うなると村のもので若い衆頭の太郎平に虎左衛門が一番弟子といふ顔をして「剣術の御修行人ふれへ通らつしやい手前は神子上典膳の弟子にして犬塚の太郎平といふもの」○「手前は新田の李左衛門でござる」両人「ハッ御免下さい」道場へ通る神子上もうれへ出て來、どちらも大兵肥満にして強さうな男庄屋久太夫少しく驚いた、斯りやア豪い人が両人來たゝどに依ると先生は危ぶなくはないが、さいしよ両人の弟子が出やうと

すると風人が「どうか典膳殿とやらる手前とお立會ひを願ひたい併しお手前は失禮ながら御若年でありながら中々のお腕前と聞及ぶまだお立會ひは申さんが一応御教導を願いたく」神「イヤあれは痛み入つたる御挨拶まだ弱年の某しが御兩名へ對してお立會とは思ひも寄らぬ併し態々お尋ね下されたるあと故に手前も修行の爲めお相手に相なり申さう」最初出でたるは大池源太左衛門木剣を以てうれへ出る神子上も心得たりと木剣にてビタリ体を固めた、前にも申上げましたが竹刀と木剣とは大きな違ひヤッ、エイ、ポカリ源太左衛門の打込んだのを閃然と体を躱はした神子上が「エイ」といふ氣合ひに大池がバッタリ尻餅を搗いて「參つた」あれを見て居た勘解由左衛門が今の氣合ひに吃驚りした、小聲になつて源太左衛門が「斯りや中々年は若いが家い」掛「左様か拙者も出でやう」代つて出でた古藤田あれも

同じく体を搗へ前同様ヤッエッ氣合ひを以て打つて來るヨーエイ掛聲と共に跡に引く又候向ふが跡に引く古藤田勘解由が千變萬化を盡して打込むと雖もいつかな如何ぞ自由に行かぬ稍々暫くすると神子上が「エイ、ヤッ」といふ氣合ひブル〳〵戰へて小手はしびれもういかんと心得たる古藤田が「參つた」神「あれは〳〵御兩所參つたとの御一言恐入つた中々我々如き若年者の遠く及ぶ所にあらず殆免ぜれお許しあれ」兩人「イヤ何ういたしてお若年者とは思はれん我々は迚も及び申さぬ」此の時庄屋久太夫が「ソレ皆な衆笑つてやれ」ワーワッといふ聲を揚げた立場れ爺さんが「うれぢやからお前樣達大層天狗を言はしつたが此の若先生は日本一だから迚も適はねい早く行つしやれ久「オイ立場の爺さんうんな奴は追拂らつて仕舞はつしやい」兩人は大きに赤面をして極り惡く狐鼠狸〳〵と戻つて來た其の

前へに先生は立場に居て寢たふりをして聽いて居ると表を通る人々が　甲「どうだい藤九郎さん豪いもんだなア先生は、あの何といふ大きな野郎が先生に打込んだ時にやッといふ氣合ひに尻餅を搗いて任鮮つた跡から立上つた奴も同しやうに身体が萎縮だといふなア豪いあとちやアねいか」といふあとを聽いて居る所へ兩人は戻つて來た」　兩人「先生……」景久殿か「どうした」　兩人「ヤッ驚き入りました合氣の術があります」　一「何に合氣が……待てよ」　大「ハッ其氣合ひは受太刀にあらず木刀を取つてヤッといふ氣合ひ私しは尻餅を搗き」　吉「手前は身体萎縮ました」　一「合氣遠當ハテ求だ年若な其者にあるべき譯はないがどりや行て見やうか」　兩人「オヽ先生おいで下さいますか」所へ立場の爺さんが踏つて來て「サア〜〜お前等は此處を早う逃げさつしやいお前等が先刻あの先生のあと

を強い惡口を言しつたといふので今村のものか怒つて神樣に惡口したものは神の罰だ今夜中に打殺して仕舞へと今茲に押掛けて參ります早く此處を逃げさつしやい」　一刀「齋が「イヤ〜〜老爺此の兩人が惡かつた俺が行つて詫てやらう」　老「駄目〜〜一「イヤ〜〜さうでないサア來」と源太、勘解由の兩人が先生の身体を守り再び來る久太夫の家」　兩人「神子上典膳殿先刻は我々兩名不覺を取り誠に恐入つた唯今一人の老人來たつて御身と立會ひを請はん爲め罷越した」庄屋久太夫が「又しても兩人が來たしつたか村の若者が寄つて集つて騒いで居るから早く此場を逃げさつしやい」伊藤老人が「庄屋殿お若い人を宜うお世話をなさる其處ナ神子上殿とやら典膳殿とやら俺や名もなき劒術遣ひ一本立會ふて呉れまいか」此の時典膳伊藤氏とはまだ氣が付きませんうれにまだ年が若いから滿心はないやうなもの、

幾分か乃公の腕は斯んなものだと取りも直さず滿心……宜しい左すれば此の兩人は老人の弟子であるとぞうで打つなら老人も……委細承知と請けに及ぶ、一刀齋は「木刀を一本貸して下された俺のは唯だ杖に突いたる木の枝ばかりあれでは失禮……」集まつてる大勢が「ソレ兩人の奴が負けたといつて爺さんを連れて來た何んだ此方は牛若の生れ代りだぞ辨慶が來やうが辨慶は牛若の家來にある、なにあんな爺いが」と騒はいで居る此の時大池と古藤田の兩人は先生の樣子を見てあると一刀齋先生は借受けた木劍取つて道場の眞中あ立上り「ザア打ち込んで來いよ」神子上典膳向ふを見てあると道は如何に前の兩人とは違つて休場へ方少しく後れを取つた樣子だがあれではならんといふ中に庄屋を始め一同が「若先生確乎りさつせい負けてはならん確乎りさつせい」ヤッ、エイ、ポン〳〵と神子上典膳が打ち込

んで來る受け太刀に相成つた伊藤先生能々道場の隅から隅まで下つて來る其の下るゝとの早さ人間業とは思はれぬ神子上典膳又た候此方の隅に押れて來た中々木劍にて打つゝと少し焦燥つて來てエイ、ズン〳〵〳〵押されるとゝなしに神子上典膳又た候此方の隅に押れて來た中々木劍にて打つゝと叫はぬエイ〳〵アッといふ氣合ひ、合氣の術もあらばゝろ典膳眞赤になつて焦燥つて居る一番仕舞ひに一刀齋「ヨー」典膳ろれへグニャ〳〵〳〵腰が抜げたばかりにろれへ坐はつて仕舞ひました、木劍を上にあげてエイと下ろして典膳の眼を見るとゥーム……勘解由、源太の兩人もアッと思ふ庄屋久太夫始め大勢が「アヽ先生が駄目だ」一「騒ぐな〳〵……斯りや神子上とやら典膳とやらどうぢや」呼んだか更らに答へがない、景久立つて又た候木劍を取つて三尺程後に下つてエイ〳〵と右左りに木劍を振つてヤッと眼の上に木刀を出したハッと氣が附いた典膳

うれにビタリ兩手を突いて「恐れ入つた御老人」一「どうだまだ若いな〳〵併し餓とに能く木刀をひねくるぞ」見物は呆きれて「何んだい彼者は……」神「して先生の御尊名は……」一「イヤイヤ名を名乘には及ばん……無島島の蝙蝠滿じてはいかんぞよ兩人行かうかい」と兩人を連れて伊藤一刀齋其の儘表に出ゝ行く跡に大勢は、神子上先生殘念でござりましたる」側にも言はも典膳が兩眼よりポロリ〳〵と涙を出して三人の姿を見送る三人は何處に參らうとも思はず東金を少し離れたる新田とのいへる所に來てホンの木賃宿といふ如き所に泊り込みました武術の競爭に神子上典膳はあの親爺は何人であるか是れ凡人に非ず豈夫天人ではあるまじ如何にも殘念千萬斯くまで一同に尊敬され天下に敵はなきものと思込んだが身の過りどうで死ぬなら今一度眞劍立會ひの其の上にて親爺を殺すか乃公が

死ぬかさうだ〳〵と年若の神子上典膳誰にもいはず唯だ一人胸に問ひ腹に答へて其の晩に一刀齋の旅宿に乘込んで來るといふ此處が名人同士の眞劍立會ひ次回に演じませう

第四席

神子上典膳忠明は一刀齋景久老人の爲めに打込まれた譯ではありません所謂位負けといふので耻辱を攝さうれが爲めに庄屋久太夫其他のものにも大に歎きました中には成程藝は上から上のあるものあの爺さんの爲めに先生はやられた、あの爺さんは人一ぢやアあるめい天狗だらう「オイ〳〵」太郎平さん今日の勝負を見さしつたか」太「俺しも見たが感心なもんぢやなアの○あの爺樣ど外刻も茂十どんが天狗だらうといふし皆んな天狗天狗といふが俺や天狗ぢやアないと思ふ」太「イヤ天狗に違ひない」○「どうして天狗と知つた」太「外刻木刀を取つてヒロ

イと上に振上げた時、脇の下に羽根が三枚宛生へて居た」嘘ばかり吐くやつがあるゝ、それで終に脇に居た人々も何んとなく神子上氏が極まりが悪さうでございますから自然と一人減り二人減り段々と減つて仕舞ひます、跡に唯だ一人典膳が忙然として居ります中に早や日も暮れかゝる　神過まつた〳〵　吾れ今は日本には恥くものなきと思ひしに今日の彼の老人ありや何人であらうか姓名も言はず其の偶立歸つて仕舞ひ、あの二人のものは扨ては門人でありつるか最早茲に居るゐとは叶はぬ斯く不覺を取つた以上は諸人も我れを頼むのもあるまじ一層のゐと切腹いたして相果てやうゝ……イヤ〳〵　待て人間死を定むれば何事も出で來さるゐとなし、併し庄屋久太夫が今までの親切の餘にして此處を去つては嘸かし世話いたして呉れた其の恩義を知らぬ奴と笑ふであらう兎に角久太夫殿に相談いた

して身の振方を定むるとせん兎やせん角やと己れに問ひ己れに答いた神子上典膳もやらを居る所へ裏の戸を密と明け又何にやら來たと驚いて振返れば別人ならぬ庄屋久太夫、時ゐ先生今日は嘸ぞ殘念でございましたらう俺も驚ろきました、前の傾人を最初打込みゐすつた所を拜見して實に私しも感心いたし村の者も喜びました、それに引返へ跡から出た彼の爺さん中〳〵以てゐ前樣が木刀の立會ひもなく參つたといつて尻餅をお突きなすつたがありやまアどういふ理由でございます」神「イヤ庄屋殿それは中々一通りふ話し申しても分らぬゐとあれ俗にいふ位負げ、あれで亦立會ひを致すときは拙者の身体は自然と血を吹出だし全身固たくなつて其の儘絶氣するものだ久「へエー劔術といふものはさういふものでございますか向ふに打たれなければ負けるものではないと思つて居りましたが

さういふものでございますか」神「固より劍術はさういふものだ」久「成程感心を致しました、うみでどうも先刻から貴方の御樣子が可怪いと思つたに依つて私しも心配して裏口へ來て考へて居りましたがお前樣は何やら御言をいはれたのに一層のあと腹切つて死のふか面目ない嘸ぞ人が笑ふであらうと仰しやつた、うれ程お覺悟をなさいましたか、うれ程恥かしうございますか」神「誠に久太夫殿忝けない御一言御身なればあそ斯くまで言つて下さる貴方のは更に厭はんが先づ此の上もなき拙者の不覺兎やせん角やせんと己れ心が己れに分らん何にか御工夫がございませうか」久「それぢやア先生一層のあとろれまでお覺悟をおされたなら貴方一人で死んでは詰まらんから……神「ンーッ……久太夫殿壁に耳偶利に口……」いはれて久太夫は言葉を密め傍に寄つて何やら神子上氏と内密話あれを知るも

の一人もふしさうかうする中早や夜も九ッ久太夫は立歸る典膳唯だ一人支度を致しまして小刀を前に手挾み大刀を横へまして我独つて居る道場を脱出でたるは九ッ半二三丁參ると向ふに農家が二三軒其の中の角の立場の奥に殿て居るのが一刀齋うれに大池、古藤田の三人、なんでゐれへ歸つたといふと今日の立會ひに其の盧此處を立たうと思ひましたが立合も惡く一カ齋氏は兩人の弟子を連れまして再び又神子上典膳の所へ尋ね參つた立場の爺さんの所に歸つて來た、爺さんは大層驚いて實にハア感心をしました彼のお二人は兎も角お前樣のお腕前して見るとあの神子上なんといふ若い人は未だ本當の先生ぢやアねいと見へますな」老爺も大層劍術のあとが好きであると見へて種々な話をして、うみで又ポンの濁醪酒を一杯飲み三人は殿て仕舞つた

忍んで來たる神子上典膳宿屋の裏に廻りますと閉切つてある所の雨戸をうして明けやうと考へたが併し人の家に無闇に忍び込み旅人を打たんといつて忍んだとあれば別に侍ひとして恥ぢる所はない若しも盗賊に忍ひ入つたとあれば是れは侍ひの生涯の恥辱人の縛りのしてある所を猥に明けるといふことは出來ぬことを兎やせん如何はせんと心配をして居りました所へ様側をパタ〳〵南無三見咎められては相成らん様の脇の垣根の下に身を密めて居る様側を歩行き來たつた一人のもの厠へ這入つたと見へうれより出て參り雨戸を一枚押明けて洗手鉢にて手を濯がうといふのを垣根の蔭より密と典膳覗いて見れば今日最初立會ひをした古藤田といふもの是れ幸ひ此處で速かに忍び込まんと心得たが併し彼か手を洗ひ仕舞ひ其の儘締められては相ならん、どうなるものかと典膳垣根の蔭より

飛出だすみれを見たる勘解由が賊と心得ましたが爲めに様の側に立上つた様子、見て居る其の所へ突然飛込む神子上がやつといふ氣合ひを掛けた、心得たりと勘解由が体を彼方に引ぬうといふ所をエイと一ト當てあてました、此の遠當てといふのは中々むづかしいので先づ芝居あそで致すと捕人を相手に立廻りを致してヤッといつて拳固を出すと三尺も離れて居る奴が成程旨くいつたもので、あゝは參る譯のものぢやアない、あれは去る先生に就いて貞玉伺ひましたかみれは中々極意のあるもので話に出來るものではない、うれは斯ういふ理由だと迂闊に話の出來るものではないと仰しやつて其の中に何にか話をして居ると側分か講談の材料にもなると心得て先生に聽くと極意を貞玉にお許しになつたのではありませんがうれは合氣の術にして即ち人間の氣を向ふに入れるものたといふことで

ざいます、前に申上げました一刀齋と神子上の立合ひ、木刀取つて景久老人がヤッといふと神子上が青くなつて尻餅を搗いたといふのは矢張り其處の理由、うれですから是等の術は中々我々如きが知るべき所ではありません、うれは餘事のみと今勘解由がヤッといふ氣合ひを掛けたるときに神子上典膳躍り込んでエイと當てる中々一刀齋の高弟たる所の古藤田勘解由が典膳の遠當て位ゐにやらるべきものではありませんが向ふは一心此方は不意のみとですからパタリと其處に打倒れた典膳は上へ昇りッカッカ奥へ通つて見ると大池源太左衛門は大醉の餘り能う寢て居ります其の側に老人も枕を着けて寢て居る樣子障子カラリと明ける途端に神子上が「老人覺悟」と一聲かけて引拔去りながら遺恨は唯だ己れる不覺を取つた丈けのみと今人を斬殺さうといふのは容易あるものではありませんうれ故に

聲をかけましたヤッと斬込むときにパサリ……占めたと手答へヒョイと見ると今まで床の中に居つたる一刀齋の委は見へも斬付けたのは蒲團と枕、南無三仕舞つたと跡に下る途端にエイ、パタリ刀をうみへ落します、老人來たつて典膳の襟首取つて

一「斯りや〳〵若いの何をする巫山戯るな〳〵慰みにあとを缺いて人を殺すは宜くあらう」典「恐入つた」時に大池源太左衛門も其の掛聲に眼を覺まして　火「先生何者……ヤッあれは今日日中立會ひに參つた神子上といふ若年者」白刃を其處へ差し置いて　大「扨ては先生を暗殺に參りしか」と腕首取つて捻上げやうとしましたに依つて　一「ア、イヤ待つた、して勘解由はどう致した」所へ勘解由も漸々氣がついて樣側から駈來たり是れは左の手を取つて居る、押へられた神子上典膳「サアお殺し下され斯くなる以上は最早覺悟を致したアヽ遲まつた〳〵御老人願

はくは御尊名を承たまはりたし、仰せの通り今晩老人のお願首を頂戴に參つたる神子上典膳」一「ウム吾命を取りに來たといふに遺恨があるか」神「イヤ遺恨といふでは更にない唯だ是れまで庄屋久太夫に尊敬され此の上總に來たつて吾れ怖きもの一人もなく所開烏なき里の蝙蝠何んと申上げやうもござらん然るに今日の立會ひあて御身のために不覺を取り恩人久太夫始め村の者共は手前を嘲り笑ふを見れば生きて甲斐なき我が命一層老人のお命もと忍び來たりし若年の過り卒ざ老人のお弟子手前の身体を一寸試し五分試し充分に討たれよ」と小刀を投出し大刀は先刻其處へ取落したる儘平伏したる典膳の擧動ハタと膝を打つた老人が「ゐれは感心をした私を存ぜぬか」典「ハッ未だお名前は存じません」一「お前は何處のものぢや」典「去れば私しは素と伊勢の國に生れ萬喜少弼に我父より仕へた

るもの武術修業に依つて諸國遍歷おせしより廻つて來たる當國當地、尤も途中にて當村の庄屋久太夫の危ふき難を助けそれを緣としてゐれへ參り一日劍道の話から村人來つては武術を學ばん所望に任じて指南といふは鳴滸がましけれど今までは我日本に敵なきぞと滿じ居つたる身の過まり……して御老体は」一「伊豆の一刀ぢや」典「ハヽッ扨ては伊藤一刀齋景久先生にて在せしか」一「オヽさうぢや」聞くより典膳は墨を二墨程跡へ下つて兩手を突き「恐入つた」一「ハヽア名を聞いて驚いたかな」典「實は手前は伊勢を離れ伊豆に參つて先生を訪問れたる所先生既に國に在らず旅へお出立になつたとのこと扨ては御老人には最早武術修業にてはあるまじ恐らくは諸國御遍歷の御樂しみ何卒一たび御目にかゝり御教へを乞はんものと思ひに思ひし又先生に今日唯今御目にかゝり尙更今晩ゐれへ忍

んで一刀齋大先生とは知らぬとは此身の大罪生きて居られぬ忠明は此場に於て切腹仕つらん」一「イヤ〳〵待た〳〵うれには及ばん」傍に聞きたる両人も感心して吉「大先生此の者がおれへ忍び來たりしは此の勘解由唯今厠へ入り雨戸を明け手を濕がんとするときに垣根の傍より飛來たつた怪しの曲者盗賊ではないかとエイと聲かけたるに勘解由が傍に寄る間もなく遠當てにして其の敏捷さ中々我々の及ぶ所でございません」一「イヤうれ等のあとを話には及ん斯りや神子上御身はあれより何處までも武術に心を入れ天下に名を成たきの存意なるか」典「如何にも」一「良〳〵」一門に加へてやらう典「我罪をゆ許し玉はり門下にお加へ下さるとのお一言實以て忝なし」と夢ではないかと典膳我身を捻つて見れば痛を覚ゆ」典「何に分先生宜〳〵……して御兩名は」と云から爰で朋人の弟子の本

名もスッパリ分る其の中此の物音お宿屋の亭主は驚いて雪燈持つて奥に來る「ヤー斯りやまア先生様……此の裏の先生が何しに今夜來らしつた神子上典膳が誠に訳目おい實は今晩お前の家に……」主「泥坊にでざらしつたか」典「イヤさうではない今日不覺を取つたが殘念に手前は死と覚悟いたして此の伊藤一刀先生を討ちに來たのぢや、どうか庄屋久太夫殿に早く知らして呉れ」主「斯りやア飛んでもない騒動が出來た」と駈出さうとした時に表の方にて」久「イヤ老爺さん來るにやア及ばん」主「ヤー庄屋様かれいおとになりました」久「イヤ〳〵宜い」それに昇つて久太夫兩手を突き「扨ては伊豆の伊藤といつて名高き先生でござりまするが、此の神子上さんが腹を切らん、言譯ない故切腹せんといふのは素と此の久太夫より出でたるあと武術に長けた先生でもまだ〳〵お心がお若い〳〵、斯く申する久

太夫が切腹いたして申譯をなさん」庄屋も感心持つて居た脇差スラリ引拔いた、側に居た大池が「暫く待つた庄屋久太夫何故死ぬるか」久「實は神子上先生がどうで死ぬとまでお覺悟なされましたのは彼の老爺を斬つてお仕舞ひおされましとお勸め申したは此の久太夫あれとても全く神子上さんに惚込んで生涯に此の神子上さんの名を殘し上統の國に神子上典膳といふ天下一の劍道者が出たと言はれたさ唯だ久太夫は感を愛するの心より此のお方にお勸め申したのは斯く申す庄屋久太夫どうか三人の先生其のお人をお取立て下すつて今日日本の財寶とも謂つべき伊藤一刀齋殿を殺せかゝ智惠附けたる久太夫あろ國賊ふり其の申譯にヒ切腹」と改まつたる庄屋の言葉老人はあれを聽いて汪鳴り出した」一「ウーッ流石は村長〳〵面白し併し却つてあれは私を殺しに來て私が死なんければ殺される

怨むべき典膳は怨みぬぞ武術の競爭他人に打れてうれなりけりどうせ己れには適はぬと打棄てるやうでは迚も天下に名を成すあとは出來ぬ人に討たれて悔しいと其の氣があるあろ武士ふり殊に今晩あれへ來たつて障子をサラリ明ける途端一言發した其のあとを最う疾うに知つて居るパタリ〳〵と二足三足歩行み來たもし其の樣子は尋常事ならじと此處へ入る間に床を出で我拔出でたとは知らやして一刀取つて斬付けた其の早業は感心ぢやがまだ〳〵若い〳〵」傍に居る門人の大池が「何んだか先生は揚げたり貶げたりして居る」とあろゞ就れも夫れへ集つたる人々は唯だ天下に名を揚げんとの志ざし所謂同氣相求むる同病相憐れむの慣ひそあで一同氣が合ひまして、神子上典膳も師弟の約を固め、而して大池、古藤田の兩人を兄弟子と「して先生外にお弟子はおざいませぬか」一「イヤ茲に

まだ一人善鬼といふものあるが、之に付いては一刀齋其の者のあとを心配をし俺が弟子ではあるが少し身持あしく何處に居るか分らず去りながら總領弟子は此の善鬼なり」典「して見れば先生の門下は善鬼殿及び古藤田、して此の大池と仰せらるゝ御人は……」二「斯りやア武藏の高輪にて刀試めしをして居たとゝろ故あつて矢張りお前と同樣俺の門下になつた依つてお前は四人の中の末弟である」典「固より斯くなる上は一日も早く其の善鬼殿とやらの兄上に就いて武術充分修行いたし」村長「久太夫が此處で証人と爲り、宿屋の老爺も其處へ來て「それちやア俺もゝゝで庄屋樣と共に此の先生が伊藤樣のお弟子といふゝとを確に証人とおりませう」今の人間と逆つて其の頃はひは何かの事が固いものでございます、爾う斯うする中夜が明ける「何はなくとも今日は御入門の祝ひ」と茶屋の老前も健や

しく兩人何に奥れとゝく世話いたしてホンの田舍の手料理にて芽出度ゝゝで神子山典膳が師匠に就いて入門の式を擧げ、サあれが神子山典膳の樣……ゝゝで庄屋久太夫が「どうか斯ういふ先生が當村にゝいで下すつた以上は切て一月でも二月でもお御足をお止め下さるやうにと無理に止められたが爲めに固より行先定めぬ草枕日本國中既う凡そ廻つたがゝれから奥州松前の端までも遍歷爲すには別に急ぐゝとでもなしうれでは爰に一月二月足を止めやうと極るゝゝで大池といふものは先生のお供いたして奥州から會津の方を廻りたいが此の者は一遍奥州を廻つたもの故一時ゝれで別れを告げ大池は再び武藏を指てゝれより段々に相州から伊豆駿河と西の國々へ赴きました、跡ゝて古藤田勘解由と神子上典膳は師匠に附て充分忠を尽さんとの心一刀齋は大層お喜びになりました、扨弟子は良い

師を取たいもの僅か一月でも恰で傍へ居て五年か十年の修業の如く殊に一刀齋が己れを殺に足る其神子上に惚込で我か術の極意を讓るは此の者よりないと思ひましたるは是れ弟子を視るおと師匠に如かず、茲で典膳上達して前申上げました善鬼といふものは一刀齋の高第おれは中々古藤田、壹子上如きにはあらず段の違ふ弟子にて遂は宜いか身上が惡く遂は先生が捨て置き難き一幾出來據おろなく、末弟の神子上典膳に申付ましてこの善鬼を一刀に斬らせるといふ、うれが即ち「瓶割の傳」に至りまするお話、併し其の間には神子上典膳の修行中艱難辛苦種々樣々千變萬化の物語りがありますから追々おれより講演いたさうと思ひます

第五席

おれより三人となりました大池源太左術門は一人分れて他國に參る傍に居るのは古藤田勘解由左術門、うとで神子上典膳は庄屋久太夫に伺つて「扨て不思議お御縁で御身の御厄介になつた然るにお手前も知らるゝ通り今我が全國に於て一を占めて居る伊豆の伊藤先生計らずも目下に加いりしは此の身の幸ひそれに付いてはおれより先生はまだ諸國御遊歷を爲さるゝに付き其の御供を致したく折角お手前にもお世話になつたが明後日は當所を去る積りだ」久太夫大層別れを惜しみ「私くしは生涯此の村に居てお頁ひ申したいと心得ました併し御修行なさるといふは猶更結構なおとまだお年も若いおと故先生に就いて充分御修行を爲さいまし併しどうか明後日といふ所はもう五日六日お見合せを願ひたい村の者一同にも其の話をせねばならぬ」といふので僅か一日二日は爭はんからと此おで事が極まり、尤も此の折伊藤先生と勘解由の二人も庄屋久太夫が

自分の家にお連れ申して悉とく、尊敬いたします翌る日あなつて村の使歩行を叮んで村中の者を呼寄せる日暮方から久太夫の家に皆集まりました久太夫が扨て皆さん今日お呼び申した のは外のお事ではないが此の典膳先生生涯此の村に居てお貰ひ申したいと思ふて居りましたが今度此の大先生のお弟子にお爲んなすつたお れに付いては修行をしたいと仰しやる、それで大先生のお供をして國々をお廻りお なる誠とにお名殘り惜しいが既う一両日經つと當所を御登足になるとうか皆さんも其のお心得で居て下さい」一人進み出でました男が「イヤもう夫りやア先生誠とお情けないお と俺等は生涯どうか先生に此の村に居てお貰ひ申したく、なに既う失礼なから先生丈けのお腕前になつて居れば お れから先きの御修行は要りません、うんお老爺様に附いて歩行いても……」久「お れ〳〵

何にを言はつしやる」○「イヤサ既う先生丈けあれば浮山だ」一人が言ひ出すと又一人「どうか先生他國に行くと仰しやらずに生涯此の村に居てお貰ひ申ふしたい、此の村にさへ居て下されば俺が娘が今年丁度十六となりますから來年になつたら先生の……」久「オイ〳〵李兵衛さん左樣なお とを言つてる所ぢやアない」唯だ農民達が集つてワア〳〵いふて居りまするが爲め何分にも事が繁まりません、久太夫がイヤ夫れはお前さん達が先生を敬して先生にお別れ申すのを嘆いて居なさるから尤もぢや夫れよりか一層のお と日本一の先生にお爲んなすつて此の上總に來て頂けば夫れ程喜ばしいお とはないまア二年か三年御修行においでなさるといふから一時さう事を極めたが宜からう」庄屋の一言に一同の者も夫れではさうと事が極まり翌る日になると俺が家からは先生にお米を一俵あげませう

乃公が處ぢやア麥を一俵あげやう、乃公は小豆にしやう小豆お
どを持つて來ても仕方がない……金銀といふものは誠に何れ
の在に參つても家には積んでない、五穀を持つて參りました故
にうれは庄屋が悉皆貰込んでうれを金子に纏めて五十兩を神
子上先生又伊藤先生にも失禮であると金子十五兩程を出し、古
藤田勘解由左衛門にも何分か金子を……流石長村久太夫の注
意三人して一百兩程の金子を持ち辭退はしたが大勢の親切に
うれでは乏いふて其の村を愈々發足、村の者共が別れを惜み、涙
を流し、ゐゝで伊藤先生に附きまして神子上典膳、先きは奥州の
端までも後あは參る積りにして先づ取敢へず上總を立ち再び
見られぬ所ど房州へ出でました、此の安房の國は御案内の通り
片偏固な國度々來るには便利惡く唯今の如く蒸氣を以て館山
或は勝山などいふ便宜おありません切て上總を立ちまして

房州、其の間道のお話はなく〳〵に於ても伊藤先生が餘事は話
さず唯だ典膳の心掛け又往來を歩行にも其歩行方萬事のみと
に注意をいたし愛に丁度上總の天神山といふ所に參りますゐ
れは江戸表からは獵船が始終通行いたしまする處で、其の比ひ
でございますから至つて土地も開けず、其の夜は天神山に一泊
いたしますす翌る日に相成つて其處を立ち、金束と申する村に出で
ましてうれを過ぎ、蛍隨の山を越へて行きまする道は房總の境
界、其の邊は總て難所でございます　典「先生ちと空腹になつた
ではございませんか」　一「左樣〳〵手前も空腹ぢや幸ひ向ふに立場
がある彼店へ參つて飯を食さう……ハイ爺さん御免よ」　爺「へ
ゝ〳〵入らつしやいまし」立場の老爺がうれへ出ます　老「サア
〳〵お三人樣此方にお掛けあさいまし」　一「老爺さん酒がある
かな　老「左樣でございまするお酒といつた所が良いお酒はど

ざいません」一「何んでも宜しいお酒を飲んで三人して途中の話又は新な風景を眺めて居ると其處に一人這入つて來たのは年齢四十一二になる人品の好い男「エヽ御免下さいまし貴君方は失礼ながら劍術の先生方でございますか」と不意に尋ねました故古藤田が「何んだ失礼なことを言ふ奴だ劍術の先生かつて不意に……如何にも左様だ」男「ハヽア柔術も取ますかな」古「柔術も取れる」男「鎗もお遣ひなさいまするかな」可怪しなことを聞くからまだ年若な神子上が「無禮な奴だ何は出來るか何は使へるかと己れの名をいはせして人の藍事を尋ねるとは何んだ」男「恐入りました少々お待ち下さい」勘「あれ〳〵待て」町人が駈出して參つたのを無禮な奴と勘解由が追駈けて參りましたのを伊藤老人が「アヽありや〳〵追駈けなどするなよハヽア彼は農民か町人か知らんがお前達兩人が勵ともすると何にか

劍術でも使へるといふ顏附をして我物顏にて往來を歩行から擦りに來たのぢや夫れぢやから能ある鷹は爪を隱すといふ自分に藝があらば決して其の藍を鼻に掛けてはならん何事も心に秘めて面に表はさんやうにしなければいかんぞヨこだ〳〵お前達は若い〳〵」と笑ひなされて居る所へ六十三四になりまする人品の好い老爺先刻の男を連れてそれへ參りまする　○「扨て貴君方へ誠に唯今手前の手代が無禮なことを申上げました為に諸國御遍歷のお方々と見受げます今夜のお宿をまだお定めになりませぬばどうか私しの宅にお泊りを願ひたい私しは直きに此の蜂岡の下野尻と申しまする所の鳥田惣左衛門と申しまする先祖は武家でございましたが既う今日より四代程後に土着して仕舞ひまして唯今は農となつて居ります夫れゆえッイ〳〵失禮を申しま

するやうでございますが武術御修行者とお見受け申しまする
ときは一夜でもお泊め申して上げたいといふのが私しの念願
彼處でちよつとお見受け申すと此の立場にお這入り遊ばした
ゆゑ取つて返してお尋ね申したのは甚だ失禮ぢうかお泊りを
願ひたうございます」何んだか譯の分らん男だと兩人は返答も
致しません、爺ういたすと立場の老爺さんは「ヤーお前さん方結
構なおとでございますぞ、オヽ野尻の旦那樣此のお三人の中で
お老爺さんの方はお役には立ちますまいか……」立場の老爺も
あれを伊藤先生とは知りません　老「お若いお侍ひはお強さう
な、時にあれは野尻の大尽と申しまして先づ唯今では房州一と
いつて北條、舘山には斯ういふ豪家はございません、先づ此の野
尻の惣右衛門さんの所に行つてお泊まんなさいまし」うれを聞
いた伊藤老人が「オヽ、夫れは日外ぞや伊豆でも房州野尻の大尽

とか人呼んで唱へる其の噂も聞いた夫れぢやア折角のお世話故
急らうと仰せられたに依つて兩人も承知いたして惣右衛門大
層よ喜び「サア〳〵御案内を貴名方お駕籠は」一「イヤ〳〵私し
は駕籠などには乗らず第一旅に出る病人や何かならいざ知らんお
身体仕健なるものが駕籠などに乗るは宜しくない」惣「成程恐
入ました」其の中立場を出でまして急いで參りますと丁度峰岡
山の横手よりうれを見ますと大河村野尻と申しまする所　惣「
旦那樣方彼處が手前の宅でございます」一「ハテ左樣か行つて見
ると中々立派にして大抵一万石位の大名の陣屋とも思しき
位ひ表の衝門を先きに駈抜けた手代が「旦那樣のお歸り……」オ
ヽ旦那樣かお歸りだと玄關の所にズラリ並んだ十二三人　甲「
旦那樣お歸り」　乙「旦那樣御歸り」　丙「旦那樣お歸り」　丁「お歸り
戻「お歸り」とうゑへ出る　惣「サア〳〵お三人の方々どうぞ是れ

へお通り下さいまし、早くお御足の洗水を取れ」直ぐに盥を持つて來る、伊藤先生が玄關へ腰を掛け神子上典膳修行中は小使同様になつて働かんければならんと先生の足を洗ひ己も足を洗ひ勘解由と三人ズッと通つた十疊の座敷、床の間といひ四面を見ると立派な飾付け　○「どうぞ直ぐにお風呂にお這入り下さいまし」典膳「然らば先生より」○「イヤお三人御一緒にお這入り遊ばして宜しうございますから……三人は案内に連れられ風呂場に來つて見ると中々大きい　典膳先生お身体を」と典膳が洗ひ、又兄弟子といふので古藤田勘解由の身体も洗ひます所へ手代が來て「エヽ何ぞ御緩くりお這入り遊ばして、又お温ければ直ぐに焚せます」萬事世話いたすのが實に宿屋でも及ばん位お、爾う斯うする中三人も上り休息して居る所へ　○「どうか此方へお通り下さいまし」案内に連られ行て

見るとこれも十疊の間、次席が八疊の間　○「どうか斯いふ汚ない所でございますが御緩くり御逗留を願ひます唯今主人が出ますのでございますが主人も今日はちと遠方に參つて勞て居ります何ぞ御膳にお着き下さいますやう」茲にお膳を持て來る田舍とは思ひきや魚は浮山ございます、何となれば房州は魚が浮山取れますから……心地好く一刀齋殿御膳へ向ひまする所へ番頭が出て來て「エヽ手遣の酒でございまして好味くはございませんが幾らでもお飲り遊ばして宜しうございます」「ふりや〳〵お前達が一々饗應して呉ては却て旨うない茲に弟子が両人居るから是れで宜い」手代「うれでは茲に差置ますから御遠慮なく……」心地好く飲で居る、扨て蒲團も雖も何れも絹快よく寢れ寢ましたが典膳考へた世中になつて勘解由の傍に寄つて「オイ〳〵迂濶に寢られないぜ」勘「何だ典膳」典膳分斯

いふ手で幾らもある我々が上總の久太夫から貰うて來た路銀を目的に親もでかしに家に泊め泊つて見れば盗賊の家だふんといふとは隨分昔からあることゝ小々油斷はならんぞ併し先生は能く睡てゐいでなさる」両人寐もやらぬ居るとゐ目を醒されて老人が　一「夜の更ぬ中早う睡か」　典、あれは先生能く睡みと思ひましたに……」　一「乃公は起て居るゐ前達のいふまでもなく中々く油斷といふものは出で來んゆゑ俺は睡れぬゐ前達は遠慮なく睡が宜い若し怪いあどがあらば吁起す併し其處に心の附たは未年の若いには感心〳〵」尤も人の家に泊るといふものは睡悪もの爾斯するうち夜が明ました發足をしやうといふときに老爺が出て來て「何かさア貴君方ゐ三人様折角ゐ泊ゐすつたゐと故今日もう一日御逗留を願ひます私しの家には先祖から傳わつたる刀又は武器馬具等もでざはまするから何か今日は夫

を一々御鑑定を願ひたうでざいます、貴君方とゐ見受申したに依て申上げます」伊藤先生が「夫ば心地好し」武器を眺るといふは心持の好いもの番頭の案内で行て見ると一つの倉に武器馬具が充分ありまし、刀劍の類も中々名劍が澤山ゐる」　一「大たものだと感心をしてゐれを一日樂しみに御覽なさる、扨翌る日立たうと思ふと　惣「今日は私し祖父が大層風流に凝まして古器物古画の類ひが澤山でざいます何うぞゐ慰みに」と又案内をされる古藤田に神子山は斯なものは見たくない唯だ武弘たゐとばかりして居る、老人は宛然あれを樂しみと及ばん限り式紙短冊の類ひ誠に古代のものがある、うれも一日では見盡されない位ゐ、翌る日立たうと思ふと　惣、又今日は色々陶器の類ひがでざいます、あれは古から傳つて居ります何かゐ慰みに御覽を願ひます」又見て仕舞ひ翌る日にゐると種々な品物を見せる、もう一

日〳〵と餘り引留ますから典膳五月蠅なつて來て典「何か怨左術門殿とやら待て呉れ今日は立たうといふと何を御覽下さい彼を御覽こと無闇に我を引留るは何ぞか理由があるのぢやるいか有あら有といつて呉れ」惣「左樣なら申上げます實は貴君方を案ひ先生方と御見受け申してお連れ申しました今段で何しても立と仰しやれば貴君方は嗣い先生でございます」典「默れ無禮なあとをいふ、早く理由を話せ」惣「實は斯いふ理由でございます風説はお聽及びにもなつて居りませうが越後あたりに住で居ります大盜賊でございます大藤茂左術門と申して何でも力は三十人力もあるとかの評判平生金棍棒を持ち歩行まして乾兒は何でも五百人もあるとかいふゝと越後界隈の家家に忍び入りまして賊を働き、うゝで出羽から奥州を廻り兩毛當陸又は上總に出て近日當國へも來るといふ大評判でございます

何んでも一代に百万兩の賊を働いてうれを持て何にか越後の彌彦峠あたりに一城を築いて我は日本の國王なり日本國は我が物なりと威張るとかいふ中々大變な奴ださうで既に私しの縁家になつて居ります常陸の國茨城郡水戸の邊りに居ります菊池佐兵術と申す家がございます其の家にては一万兩程金を蓄られました、夫れが爲め最う當節では房州一國皆な金を地の下に埋めて仕舞ひ豪農豪商に至るまで金は家へは置きません夫れに門戸の締りも充分にして居る有樣うれで世間の人が申すには房州では野尻大尽……己れの口から申すのも異なものでございますが來れば一番先きに私しの家を目指すといふんで幾ら百姓町人を集めて人ばかり多くても役には立ちませんゝろで豪い劍術の先生方があつたらば何百兩の金を出してもお雇ひ申さうと思ひましたが此房州には名高ぎる先生もなく

然るに此の間金東のあたりで貴君方のお姿をお見受け申しまして、アヽ好いお方がと想つてゐれへお連申しました、斯して私し共へ忍んで來るまでは今日か明日かと待つて居ります位め貴君方を盗賊防ぎのためにお御足をお引留め申したのでございます」委しき物語りを聞くより典膳勘解由の兩人が「ゐりや老爺馬鹿にするない夫んから爾うと先きに何故言はない……何らしたもんだらう典膳」典「困つたなアうんなふとに頼まれるのは嫌だといふと賊に然いたと言はれるし爾うなれば我々の恥辱だ先づ先生にお話をしやう」奥の座敷で書物を讀んでゐいでなされた景久先生がお笑ひなされて」一「斯りや〳〵典膳や遠から俺は左樣ぢやと心得て居つた其の大藤とかいふ奴は中々武術に長けて居る由一遍は其の者に出逢ひたいと俺は思ふて居る所ぢや丁度幸ひ別に急ぐといふて目途もない旅

老爺の頼みに任して賊の入るまで此處に居らう」典「先生の思召とあらば結構でございますが併し先生何時參りませう」一「何時來か夫れは分らん」典「斯りや惣左衛門何時頃來る」惣「うれは分りません一年で來るか十年で來るか五十年で來るか……」典「オヤ〳〵大變な處に泊り込んだ」跡は笑ひにかつて仕舞ふ斯うなると三人も眞逆此所を振放して行くと賊の來るのを聞いて逃げたのであらうと耻辱にもなるし賊の來るのを待つとして若し來たらば國賊たるものを斬つて刀の試し幸ひなりと若年の典膳は勇み立つ老人も氣長のお方、扨てさうなると村の者共が「野尻の大盡さんの家に寄いお方が留つて居る俺は劍術を習へに行きますべい、乃公も稽古に行きますべいと追々聞傳へて來ますので遊んで居るのもつまらんと先生は手を下ろしませんが古藤田、神子上の兩人がゐれを敎へるサア斯うな

ると百姓達も大層勇んで來て最う一ト月も稽古をすると免許でもされた量見におつて、神田の源右衛門、蛙蟇の牛太などゝ云ふが」○「これは〳〵神田氏か」△「源右衛門殿でござるか」などゝいふ言葉を使ふやうになつて自然と武張つて來る、これを聞いて八ケ村の者どもが此の三人を尊敬する、凡そ此處にワイ〳〵足を留めて二ヶ月半、或る夜三人は充分に酒に醉ひまして今日は綏然寢やう今夜あたりは中々賊などの來る晩ではない……併し盜賊の來るのが知れるものではありません、あれは俗人の言ふ言葉、一同に寢靜る此の折夜中になつて典膳が大醉の餘り咽喉が乾き

醉醒めに下戸の知るまじ水の味

水を飲まうと座敷を立つときにゴー……といふ聲あれはと驚き典膳が彼方の唐紙を押明けて向ふを見ればパッと明るく、抜

足を致して二間三間四間行つて見れば既う賊が這入つたものと見へて凡そ三四十人各自得物〳〵を携へて居ります……繪虚事といひまするがあれは皆昔の有樣に昔の有樣を寫したものの盜賊は皆な鉞りを持つて居ります、其の昔は賊が持つて居たものと見へて此の連中は鉞りを持つものもあり長刀を持つものあをり、主人の惣右衛門は繩目に縛られ、居間の桂に縛し附けられ、惣左衛門の女房絹といふものも同樣、悴の惣平、手代の兼一凡そ十五六人が皆な繩て縛られて珠々繁さ、典膳跡へ取つて返して」の典「仕舞つた古藤田、賊だ〳〵」 拗「もう遅入つたか醉つて居て知らんのが殘念だ、先生ワ……」と見ると伊藤先生は寢床みはお居でおさらん」 拗「ヤッ斯リャ先生はどう爲された若しやお間違ひは……」といふ時に 一「騒ぐな〳〵お前達は能う寢て居つたが俺は既う疾うから存じて居る併しお前達を起すと血

氣に焦燥つて騒がしいに依つて寢かして置いた今騒いではいかんぞよ、久成るべくは盗賊と雖も人命ぢやに依つて命は取るな、何づれも生擒にせんければいかんぞよ」見れば這は如何る老人はちやんと支度を爲され樣側の戸袋の脇に立つておいでなさる兩人は驚いて「成程先生は先生して何時頃お眼覺めになりましたか」一「何に既う乃公は一時ばかり跡に眼が覺めて居たその中兩人の者もちやんと支度をして」典「それぢやア裏と表の挾討」勘「合点」とあつて古藤田勘解由は裏の樣側の所に出る神子上典膳は玄關の所、老人は此の邊は容易ふの人が來ないといで樣側の戸袋際に立つて居て兩人の者に成るべくは取押へさせ自分は手を下したくないといふ思召し、それとは知らず盗賊は」○「何うしませう頭首」茂「待て〳〵無闇に殺戮たつて仕方がねいそれよりか金の在所に案内させろ」○「宜しうございます」茂「鍵を探せ〳〵金藏を明ける」○「合点だ」乾「兒達が五六人到頭〳〵手代の象吉に案内をさせ金藏の鍵を取出させる、聽て」金藏に這入つて見ると澤山金がある、泥坊達が「何んと何うだい金もある所にやアあるぢやアねいか」△「さうだなアソレ擔げと兩人よつて千兩箱を一つ……中々千兩箱は重いもので擔げ」ございます、近頃講談師などの若い先生方が能く話をする時盗賊が他家に這入つて五千兩一人で盗んで懐ろに入れて來た三千兩扶から出したなどいふ人がありますがそれは知らないから無理はありません、紙幣なら卒う知らず、金を五千兩持てやう理由がない三千兩懐ろに這入るものではない況して千兩箱を一つ一人で擔げるものではない……皆な藏から金を持出して樣側に積んだ其の中一人の盗賊がうれへ駈けて來て「斯りやアを可怪しいぞ〳〵」△「どうした」□「樣側の所に何にか一人立つ

て居やがる」△「仲間が〳〵」○「仲間ぢやアねいやうだ」△「ウム」此處の家の下男か成る丈けうんお手向へをするやつア殺つて仕舞へ」○「合点だ」此の時古藤田勘解由左衛門が「オヽ汝等能くも今晩此家へ來たな我々は當家へ二ケ月前より汝等の來るのを待つて居た古藤田勘解由左衛門といふものだ塵殺し覺悟をしろ」○「何にを小癪ふ」と烏の金平長刀取つて立向ひエイとばかりに斬込んだを何かは堪らん一刀流の腕前烏の金平バッタリうれへ倒れる、跡か續て二三人右左より斬込を必ヽ得たりと樣側へ飛上つたる古藤田が瑞て師匠より習ひ覺にたる一刀流の極意必死を極めて立會爲め五六人のものバタ〳〵〳〵」○「ヤー敵はぬ强ひぞ〳〵」○「それぢやア盜賊防ぎの劍術使だ」○「ソレ逃げろ〳〵」と表の方にバタ〳〵駈出」○「飛でもねい所ろに道入つた大變な奴だ早く逃ろ」を立騒ぐ待掛たる神子上典

勝晴閣に待て居てエイと暫る首は前にバタリ胴体は後にドタリ」○「ヤイぼん太どうしたんだ」△「待〳〵ぼん太の首が前に落みちたぞ」□「みりやア可笑い」といふ中に又やられる」×「ヤア又爰に何にか居るぜ」といふ中神子上典膳玄關の戸を左右に押開大手を擴げ」典「待て盜賊共吾は伊勢の國の住人神子上典膳忠明と申す劍道修業人、汝等の當家に來るを二ケ月前より待設けれ、うゐへ來るは飛で火に入る夏の虫一人も殘らず塵殺し觀念しろ」やア爰にも大變なものが居るぞ逃出〳〵裏口に參らうとすると古藤田が裏から致して「サア逃來るものは一人も殘さんぞおれを見居た典膳か「待て呉れ乃公に半分は殘して置いて呉れ」頭到神子上と古藤田の兩人が當るを幸ひ面白い〳〵と邊に三十何人を一刀の下に斬殺して仕舞ふ、此時伊藤老人が「既う宜い〳〵ア、血氣に焦燥てはいかん、斬なといふのに斬つて仕

舞ふた者斬つてはいかんだよ夫れ〳〵うこに居るのは長本のやうぢや刀を棄てゝ縄打て〳〵」大藤ゐれを聞くより立腹いたして「ナニ猪口才なる木ッ葉野郎越彼の國の住人其の名も高き大藤が腕を知らんか乾兒の復讐觀念しろ」と鐵の棒を取つてビユウ〳〵振廻はした其の勢ひは人間業とは思へぬ位ゐ神子上古藤田を相手に致して居き所の悪左衛門の住居振廻はしたる餓の棒典膳、勘解由の二人が必死を極めて左右から斬り込むと雖も中々以て側にも寄せずうゐを生じた鐵棍棒アハヤ古藤田勘解由左衛門鐵の棒の爲に一撃に打ち殺されんとするとき此方に居つた伊藤老人が「エイ」と掛けた氣合ひゐ大藤茂左衛門ヨロ〳〵と後に下がる、典膳透さず「エイ」といふ聲諸共に斬込んで右の手を斬落した、大藤は「殘念ッ」と左の手にて鐵棒を振り上げたる所ろを又候伊藤老人が「ヤッ、エイ倒れた所ろを神子

上が斬らんとするを古藤田が「典膳待つた左の腕は手前に呉れろ」……盤でも喰べるやう……飛蒐つて斬付け今度は左の手を斬落した、大藤はバタ〳〵夫れへ倒れる」「もう宜い〳〵典膳止めを刺してやれ、併し生擒にせやして斬殺したは殘念、ソレ皆なの者の縄を解いてやれ」ゐれから一同の縄を解いてやる所ろいたる所の悪左衛門「ハッ恐れ入つたる貴君方のゐ腕前感心いたしました、兎も角も屈を致さねばなりません」夜が明けて役所へ届げる、役所よりは六人の檢使、一應改めるとうゐで兎も角も盜賊を一人なり二人なり活かして置けば宜かりしが麈殺しに致したがために大きに調べが面倒と役人が心配を致たして居ります〳〵時に一刀齋先生が「イヤ〳〵御心配あるな二人彼の物置に縄り置いた、盜ろく典膳、勘解由の兩人、並びに悪左衛門が「どうして是れは……」「イヤ〳〵驚ぐなよお前達は唯だ斬り

さへすれば宜いと心得て後の証據になるべきものを生擒にせぬのは宋だ〳〵若い〳〵」

兩人「して先生は何時の間に……」

ナニお前達が騒ぎ立たる其の中に兩人を當てゝ氣絶をさせ置き其の儘物陰に連れ込つて烏渡縄にて縛し置いた」と云いた一同其の者兩人は長助丈助といつて大藤の乾兒、これが彼方此方に於て賊に這入つた一條から抑も大藤といふものは越後の國にあつて妾か十何人盗んだ金は彌彦峠の脇の谷間に岩で造つた藏同樣、これに凡そ集まつて居た金が一萬五千兩ばかりとさいますと一々申し立てましたに依つて直ぐに所役所より越後に此の一件沙汰に及ぶ、そこで此の野尻村に海發寺といふお寺がある其處に一同非むつてやりました、これにて房州一國先づ賊難を逃がれて宜かりしと、これを聞くより彼方此方の村で三人の先生へ何にを上げて呉れこれを上げて呉れといつては呉れ

ます、これが自然に上總にも知れる、下總は申すに及ば屯武藏、常毛出羽奥州まで忽ち知れる、これで伊藤一刀齋先生が今に當國にもお乘込みになると出羽奥州皆これを相待つて居ります、扨て惣左衛門が實に此度の儀については御禮の仕樣もない若しこれから御旅行中お困りのことも御ありますまいが萬一のことがありましたから、いつ何時にも御書面を下されば金子を差上げます」と一方ならぬ喜びやう、爰に丁度三ヶ月程足を留め人を殺したのも人の爲め不憫だといふので墓詣でをいたし、三人野尻を立ちまして、これより小淺へ出るゝの日逗上人の御誕生のあつた誕生寺といふお寺へお泊りになるといふお話次回に演じませう

第六席

茲に三人は房州小港誕生寺に參詣を致します、此時誕生寺の住

職、高名な武術者伊藤先生故に大層喜び「どうか當寺に當分お止まりあつて緩くりと御休息を願ひたい」とあつて三人は此處に足を止めること二十日間ばかり然るに伊藤先生は碁を能くお打ちなさる大抵三段位の所、誕生寺の住職も三段位迄夜無中になつて打つ傍に居る神子山典膳、古藤田勘解由は折ういふことは嫌ひ、暇があると海岸へ出ましては彼方を見物此方を見物して歩行く、其の中に其の月も過ぎて彌々明れば五月になる此の時誕生寺の住職が「時に三氏も當國へおいでになれば此の節句には鯛の浦を見物なされ、それは態々他國から尋ね參る人が多る左樣なされ固より諸國を廻るのは名所舊跡等を尋ねそれを楽しもうと致すもの一刀齋もそれは幸ひなことでござる然らば其の日は船にて參らん」念々其の日になりますと船を一艘借受けましてお住職を始めとしてお弟子坊さんが一人以上五人

にて直ぐに門前の海岸に船を着けさせ猟船の中乘心の好い船を一艘借受けまして船頭が八右衛門に兵吉跡に一人の船頭、辨當又は瓢に酒を入れまして〳〵と漕出す、其の日は晴天にて夜明方から餘多の船が出まする正午時分になりますと海岸を離れまして大凡一里半、二里餘り參る、成程海は紅を流したやう餘多の鯛がうれへ參りましてヒョイ〳〵と跳る鯛は水中にては餘計に赤きものでございます、此方を見れば山あり向ふには誕生寺のお堂が見へ、遥か向ふは青海原、海上の景色は實に言葉にも筆にも盡し難い位ゐ、扨て此の鯛の浦のお話に付いて一言申します、ゐれは鯛の浦といふのではありません本當は妙の浦と申します、何となれば其の昔日蓮上人樣が此の邊りにおいでになつて拂子を以て船中から海上へ南無妙法蓮華經と題目をお書きなされ忽ち夫れが海に生へたと申します、此等は

佛説のみと故に可怪ものでありませうが、土地の人が斯くは申傳へて居ります、尤も日蓮大師のお歌に

長閑なる水には色もなきものを
風の姿や波と見るらん

といふお歌があります、尤もこれは佛法の道歌でございませうろで其の題目が海へ生へて居りました、これへ餘多の鯛が來て其の題目を悉とく飲んで仕舞ひました賦に不思議なるとである、して見れば此所に居る此の鯛は日蓮上人様が飼つてお置きなさるものだと見へるといふので諸人が此の邊りの鯛は決して獵を致しません、去れば獵師も獵へ參りまして歸り掛は皆此の邊りへ來ると鯖或は鰯の類でも籠に一杯なら一杯づゝちやんと其處に投込んで鯛の餌にやりますさうでこれを獵師の務めとして居ります、うろで此の邊りは大用鯛が多いけれ

ども之れを一人として捕るものはありません、然るに維新の時其のやうなる不開化なことはないといつて此の鯛を獵しましたが恰で飼つてある如くでございますから大獵であつた爾かも之を買ひ出して獵をしたものゝ十八人といふものが四日目程に一時頻ひ付きまして先づ只今でいふ虎列刺病如きの病ひでこれに關係したもの丈け悉皆り死んだといふこれは確か明治十四年頃のお話でございます、それから亦獵師共が驚いて決して獵を致しません、これは房州に參つた時委しく咄を聞きました、併し斯う申すと前回には上總の東金の山來又は鯛の浦のお話で何んだか名所圖繪で拵へるやうで肝賞な講談が遲うなりますから略します悉とくお喜びになつて伊藤先生酒を飲みタ景になつて船を返して參ります、其の中に皆近所の豪商或は豪農達も當日は樂しんで鯛の浦へ參つた歸り掛け ○「お

れはゐ法主様今日は誠に好いゐ天氣で」法「ハイ結構でございます」△「イヤもう今日は好い心持に遊戯を致しました」皆船が一時に揃つて歸る爰でお住職は誕生寺に伊藤先生續いて門人兩人を連れて歸ります

此の時磯村と申しまする所の先づ豪商でございます、尤も田畑も澤山あります、六右衛門といふものがございます、其の六右衛門の親家の者が誕生寺門前にあつてこれを佐兵衛といふ或る時磯村へ參りまして六右衛門に色々な話しを始める、所ろが此の六右衛門の娘でございます、何ういふゐとでありましたか去年の十月頃から發狂いたしまして恰で言ふゐとが變つて居ります、婦人の發狂は重もに色情から起ゐつて俗に淫發狂なぞゝいふゐとがありますが、ゐれは爾うてはありません、唯だ毎日理由の分らんゐとを言つて

女「阿父さん妾しは巴御前や板額さ

ういふ女を捕まへて劍術を使かつて見たい」又は「長刀を執つて見たい」又或る日には「阿父つさん妾は角力取りを夫に持ちたい妾は神様になりたい」などゝいふゐとが實に日々烈しくなつて來て……姫野の雉子夜の鶴子を思はぬ親はなく、ゐれ丈け大家の娘でも發狂者は仕方がない、始めの中は醫者に掛けて見ましたが何分にも藥の利き目もゐし、といつて別つに外の病ひでは なし身体は丈夫、食する物も二人前位ゐ夜分になると少しも寢ません、一ト間に這入つてチャント座つて居る其の言ふゐとが實ゐ可笑しくもあり又た怖くもあり夫れが爲め皆な六右衛門の家の奉公人達は氣違ひ娘〳〵といつて居る、うゐて或る人が加持祈禱をしたら宜からうといつて世話する人もあり又たは日蓮様の御符を頂だかせして詰まり半歳の餘も經ちましたが何分にも癒らん、此の時六右衛門が不圖佐兵衛に向つて誕生寺

に剣術の強らい先生が來て居なさるといふあとだがお前知つてござるか」佐「ハイ遂い此の間だも鯛の浦を御見物の折りにお供を致しましたが兩人は未だお若いお方、一人は年の老つたお方、誕生寺の寺男あに聽いて見ると何んでも日本一の先生であるといふあとでございます」六「さうか夫れぢやア佐兵衛どんお前に一つ頼みたいあとがある、俺しは誕生寺のお法主樣に心易くないからお前行つて娘のあとをお話しをして、成程物を見ると斯ういふ氣狂がひは豪い武術の先生か又は弓の先生あり蓋目の法とかいふがあるといふあと、夫れ丈け豪らいお方なら何んとかお考いがあろうから一つ頼んでは呉れまいか」佐「ハイ宜しうございます」夫れぢやア私しが參つてお願み申しませう」其の晩は泊りまして翌る日戻つて來た誕生寺の門前直ぐにや寺に參りまして御小僧さんに取次いで貰うとうれをお聽

きに相成つて　佐「ア、佐兵衛どんか來たか此方い昇らつしやい」佐「ヘエお法主さん誠に御無沙汰を致しました付きまして　は少々お願い申しに參りました外のあとではございませんが此寺に久しうおいそなさる三人の先生でございます」佐「ハイ　佐「エ、實は其の私し共の線家の磯村の六右衛門でございます　佐「ハイ」佐「娘のお梅は當年歳が十八になりまして何にか斯ういふあとを申すと手前の身内を譽めるやうでございますが中々世間の娘と違ひまして外に出るにも下女の一人又は手代の一人位は連れて出まするので決して濫行かあとはありませぬが去年の十月頃から氣が違ひまして……又中には惡口を言つて彼女ア色男が出來て夫れに懸煩らひをして居んだなどゝいふ人もありますが中々ろんなものではございません手前共の親類の娘は……　佐「あれ〳〵佐兵衛さん夫れア親類の娘さん

の自慢に來たろうなものぢや爾んなよとでは話が分らん一体どうしたのぢや」住「うよで御祈禱もして見ましたし當寺様の御符も頂いて飲ませましたが何分にも癒りません、所で六右衛門といふ男は大層古い本が好きで色々なものを始終見て居りますが何にか或る書物の中に素い先生の武術の極意とかで發狂ひが癒る又は狐附が落ちるなどゝいふよとがございましたさうで、うれから此方に素いお方がおいでなさるので私しにお頼み申して呉れとのよとでございます何うでございませう人間の命が助かるか何うかといふ所其のお方においでは願はれますまいか」住「アヽ左様かうれでは一つ先生にお尋ね申さうお弟子を呼んで聞くと「今三人のお方は海岸の方へお遊びにおいでになりました」所へ戻つて來た一刀齋勘解由と典膳、住職は夫れへ參りまして　住「扨て先生此の磯村の六右衛門と申しま

する者の娘に當年十八になる梅と申すものがございます、うれが去年の十月から氣が狂ひまして理由の分らぬよとを申して居りますので大きに親々が心配を致して居ります此の佐兵衛と申しますものゝ親家でございます、何うか先生事に依つたら狐附ではないかと人がいひますが御工夫はございますまいか聞くより年若き典膳が「宜しい手前參つて狐附を落して上げやう」一「斯りや典膳うれは血氣に焦燥る匹夫の勇といふもの、いかんいかん、併し故久が一應娘を見舞ふてやりませう」佐「うれでは何うか先生願ひます、私しが御案内を致します」と氣輕なお方でございますから大先生は典膳、勘解由の兩人を供に連れ、佐兵衛を先案内と致しまして是れより磯村に參ります、先に駈拔けた佐兵衛が　佐「サア先生がおいで下すつた」六右衛門夫婦はうれに出まして　夫婦「宜うよろおいで下さいました、サア何う

ぞゐ上り遊ばして下さいまし、賊に僅た一人の娘が氣が違ひまして何の親として樂しみがございませう」一刀「オヽ嘆かつしやるな尤もだ、何處に居られるか」夫婦「ハイ處彼の部屋に居ります」一刀「傍に誰か居るかナ」夫婦「イヽエ誰も居りません、人が這入りますと直きに其の者を捕まへて手暴いゐとを致したり、何か譯由の分らんゐとを申しまする、うれ故宅の率公人達は驚いて誰れ一人として這入る者はございません、其の唐紙の内でございます」勘「さう、かといって古藤田勘解由が唐紙を細目に明けて覗くと机の上に頬杖を突いてウツラ〳〵として居る樣子、總べて氣狂ひといふものは平生は眠つて居るものでございます、此方に參つて神子上は　勘「美い女だぜ」典「さうか」勘「中々奇麗な女だ」伊藤先生が「コリヤ〳〵何をいふ誰も來るなよ皆な一同這入つてはいかんぞよ」唐紙みをキッと明けて老人

中に這入りなさる」一刀「所りやゐ前は醫家の娘か」机の前にピタリと坐り直して」梅「無禮者下れ、何故なれば側に參りしぞ下れ〳〵」ハヽアとゐ笑ひなされて」一刀「コリア〳〵」勘解由刀を持て」勘「ハッ見まりました」と先生の刀を持つて唐紙の内に這入ると又「無禮者抑へろ」と娘に言はれ驚いて古藤田は跡に下つた、六右衛門夫婦は心配をして」夫婦「若しゐ若い先生方あんなゐとをいふて大先生が娘を斬つてゐ仕舞ひなさりやアしませんか假令氣違ひでも命あつての物種殺してはなりませんが大丈夫でございますか」典「大丈夫だ心配をするな」娘は動きもせず唯だ座つた切り、伊藤一刀齋景久先生の顏を見ましては」梅「下れ〳〵」と言ひます、能々見ると兩眼逆立ち鬢の髪は下つて何となく物凄く……發狂者は總て眼の配りが違ふもの、此の時景久先生大刀を側に引寄せたけれども發狂者でございますか

ら逃げる氣色もなく、何をすると見て居るとエイと引拔いた大刀右の膝を突きまして」　一刀「エイ、ヤッ、ハッ」といふ聲、唐紙の外で六右衛門夫婦及び神子上古藤田はどういふあとを爲さるだらうと考へましたが唐紙は閉切つてある尤もお這入りあされた時決して誰も見てはならんと仰しやつたる爲め覗くあとは出來ません、其の中パタッと昔がした、娘が倒れる唐紙をサラリと明けて」　一刀「既う是れで宜い〳〵」六右衛門は驚いた」六「ヤア先生飛んでもないあとを爲さいます、貴老は娘を殺してお仕舞ひなされアしません、アヽ〳〵既う娘は冷たくなりました」　一刀「慌ぐな〳〵、今に蘇生をいたす」家中騷立ちて侯婢共があんあふとを言つて詐欺師に金を出して家のお嬢さんを殺したんぢやアないか」などゝ云いで居ります、先づ唯今なれば凡そ十五分間か二十分間ばかり氣絶をして居たが又候這入る一

刀齋娘を抱起してエイと入れたる一活にハッと氣が注く」一刀「水を持て」神子上典膳水を持ち來る、それを一ト口飲せて」　一刀「所りや心を確に致せ、氣が注いて」　梅「ハイ」と云ふ答へと共に其處ら邊りを見廻して机の側に平伏してワーッと泣出した、其の泣聲が尋常の人に返つた樣子に六右衛門夫婦が「コリャお梅や氣が注いたか」　梅「アヽ、父樣母樣面目ないあとでございました」　夫婦「何う致した」　梅「私しは何にやら百里も二百里又は千里先の國へも一年ばかり行つて居りました故細のあとを忘れて仕舞ひました所が今漸々氣が注くと家の座敷父樣姿しは何う致しました」　夫婦「アヽ、先生難有うございます最うあれで氣が注きました」　一刀「可し〳〵氣が注いたあれて一日二日は殺くりと氣を休ませ察かして置くが宜からう」と伊藤先生の一言に老人夫婦の其の喜びは譬ふるに物なき位ゐ、爰でお梅は發狂が癒

つた、扨てあれは別に狐が附いたのではなく唯だ神經の狂ひから發しましたもの、又一刀齋先生が何としてあれを癒したのでありませうかふ將者でもよし又器械で癒したのでもありません是なん劍道の極意の一ト手、發狂人又は狐附き其他癆の病ひなどを落すといふのは是は奇々妙々武術の極意の一手にあります、尤も直心影流の始めといふものは一の靈劍があつてこれを右劍左劍と唱へ左右に刀を振るときは一時癆りが落ちるといふ奥傳があつたもの、それとはズット上手の一刀齋が飯篠長威齋先生が編出しました合氣の一ト手人間の神經を茲に癒したといふ一刀流の極意なれは後に神子上典膳に讓りましたさうです、扨て六右衛門夫婦は大に喜び悉とく此の先生を尊敬いたすサア斯うなると彼方の村此方の村から「乃公の村に發狂者も何うか其の先生に癒して貰ひたい」乙「乃公が村には勞症で

六年此の方煩つて居るものがあるあれも癒して貰ひたい」丙「なに夫れよりか婆さんの眼を明かして貰うが宜からう」丁「跛足は癒るめいか」戊「乃公が村にn阿呆が三人あるが癒るめいか」イヤもう無理なおとをいふて來たが利よく言つて斷つて居つたが餘り大層に尊敬されるのを遂に五月蠅思召しあれから誕生寺の住職に別れを告げ房州の名所舊跡を彼方此方と經歷りまして爰に道を變へて常陸の國段々と出羽奥州に入込んで遂に出羽の國山形の大守最上出羽守の藩中飯田播磨守武俊の宅へお尋ねになりまして最上家の家中大勢に一刀流の劍術を敎へ遊ばし爰に最上家の老臣新庄近江といふ人が近郡近國の武術者を集め所謂擊劍會といふものをお開きになり武術の大勝負があります時若年ながら神子上典膳此所に於て大勝利を得るのお話次に演じます

第七席

扨て伊藤一刀齋景久先生は小濱龍生寺の住職に別れを告げ古藤田勘解由左衛門は所用あつて伊豆の國へ遣はし神子上典膳一人を引連れて愈々出羽國山形に乗込む……愛に出羽の國山形の太守最上出羽守御當主直治公の御代、此の最上家は御舊家にして百二十万石だと申します、併し成る確かなる書物を見ると其の高六十万石であつたさうでふれが實説らしうございます、尤も奥羽の大名は表高より内高が多うございます既に伊達公は六十有餘万石内高は百五十万石も上るといふふとでございます此の最上様は源五郎様御代に御家中の騒動太守は御幼少にして一時お家改易ふれは最上騒動といふ外の講釈があります、から暑しまします、ろで一旦潰れましたのを又徳川の御仁愛から お立て置かれ交代旗下となりました、尤も幕政時分の交代

旗下と申します、と何れも昔の御大家一旦潰されたのをお取立てになつたお家です、其の後近江の國蒲生郡大森といふ村がでございます、又江戸お屋敷は本所御厩河岸といふ所に赤い御門の屋敷を構へ、只今は御厩橋と申します、今でも幕政の時分からの最上様の屋敷の表長屋は殘つて居て大分今では汚なくなつて居ります、併し是等は餘事爰に御家老の新庄近江といふお方は二万二千石お取りなされ至つて武をお好みに相成る、當代直治公も殊更武をお好みになる、成時飯田播磨守武俊といふ御重役御前へ出て四方山のお話しの節治に居て亂を忘れず泰平の御代と雖も戰國を忘れては武士でない、其の武張つた話から遂に面白くあり」　直治「然らば近日二の丸馬場に於て家中の者一同、それに付いて仮令浪士無禄の士と雖も武術の心掛あるもの

はみれを呼寄せ充分武道を磨かせ而して腕前のある者は一々召抱へて宜らうといふ御沙汰、最も好む所なり殊に飯田播磨守といふ人は十代の折千石取つた人の息子でありながら武術を好み、十四才にして國を去り武藏の國は申すに及ばず中國筋も二十歳になるまで廻つたといふ人、此の折伊豆の國にて伊藤一刀齋の門に入り一刀流を究めまして後に此人自ら飯田流といふ一派を立て一名飯田一刀流といふ妙手を一手按出した人でございます、それより松崎將監、相木久米之進等を係り役として布令を廻しうれから建札を致しました、來る何日までに松崎將監の屋敷で名札を以て届出でよといふ、うゐで追々浪士の人々も尋ね參りまして充分のお手當、酒の飲みたいものには酒を饗應ひ、下戸で甘いものお欲しいといへばうれを遣はし實に充分なおとでありますう

れへ尋ね來たりしものも大層喜んで居る、愈々日を定めまして二の丸大馬場にて六日の間武術の立會ひ正九ッ時より夕七ッ時までといふおとになつて家中の面々何れも腕を磨いて恩賞に與からんと鎗術成は長刀又はくさり鎌其の他手裏劍、尤とも飛道具は禁じてあります、初めの日は番數六十餘番といふ立會ひであります、尤とも此の時行司役といふものがなければ相成りませんから此の行司役として飯田播磨守うれに新庄近江自ら鐵扇を取つて行司をなす其の中最上の御一門にして戸松十太夫といふ御人が當年七十一歳此の人文武兩道一秀で殊に軍學兵法の指南をする古實家でありまして此の人も謂所檢査役としてうれへ列ぶ誠に勇ましき立會ひ、直治公御機嫌麗はしく尙は翌の日をお樂しみ、又た翌日になる番數も多いが爲めに少し刻限を早めまして四ッ時よ

り始める、此の日も凡そ八十番ばかり、三日目あなりまするとあれを聞付けて奥州出羽を始めと致して随分五十里位の先から尋ね参る人があります、益々人員は殖えお喜び相成る、六日といふのが追々数が殖えて参りまするが爲めユモウ四日のお日延べ以上十日間、然かるに第九日目でございます其の日の丁度八時分お場所の此方には足輕共が警固をして居ります、所ろへ劔術修行の者一人参りまして」　修業者「お願ひ申す」　足輕「何人でございます」　修業者「手前は二十里先にてあれを承まはるに御當家にて去る比ひより武術の立會ひあれある由依つてお尋ね申して参りしものでござる」　足輕「お名前は何んと仰しやる」　修業者「拙者は神子上典膳と申します」　足輕「ハア武術は何をお嗜みにおる」　典「劔術でござる」　足輕「お流儀は」　典「一刀流」　足輕「師匠は」　典「伊藤一刀齋景久」足輕がクスリと笑た」　典

何でござる」　足輕「伊藤先生の御門人」　典「左樣」　足輕「イヤもう來る人來る人が立派お師匠の名前をいつて自分の腕の良といふのを見せやうといふ積りか種々樣々おゐとを言ておいでなさる併し取次と仰しやれば取次も致さうが」　典「ヤー無禮な一言重役共に仰しやつて下さるやう、お疑ひがあれば唯今師匠一刀齋みれへ参ります」　足輕の一人が「オイ柴田可笑な野郎が來ぢやアないか」　柴田「オヽ名も何も知ない奴が來た」　○「伊藤先生がみれへ來なんて法螺も好加減に吹けば宜いのに……」　柴田「伊藤一刀齋といふ人は播磨先生のお師匠樣ぢやアないか」　○「左樣サ」頻と笑うて居ります」　足輕「ヘイ唯今大層まだお取次の者來て」　典「お取次を願たい」　足輕「ヘイ唯今大層まだお取次の者が扣へて居れば少々お待なさい」所へ彼方よりブラリ〳〵と一刀齋先生竹の皮草履を召れ拾で給に皆た仙人かと思ふばかり」

一刀「何うした典膳」　典「ハイ唯今取次を頼み入れまするとお斯様斯様の次第」　一刀「ハヽア左様か」アイヤ斯りや〳〵お前達當家に飯田播磨守武俊といふものが居らうな」　足輕「左様で」　一刀「來といふて呉ろ」　足輕「扣さつしやい爺い、飯田播磨守武俊といふお方においでになるが來といふて呉ては分らん姓名を名乘れ」　一刀「イヤ〳〵お前達の知る所ではない老爺が來といへば分るだよ」　足輕「老爺ぢやア分らん」　一刀「ハヽア大層威張て居るがお前は何ぢや」　足輕「當家の足輕だ」　一刀「ハヽア足々疎」と足輕「何だ足々疎とは」　一刀「大小を差しても侍ひではない足輕おや驚といふ鳥は鈍鳥の一にして己れが卵を生でも孵へすることは知や鷄に頼んで孵して貰つて我子を育てるといふ鈍鳥、お前は道物主が畜寐をする暇に酒落に拾らへたのが生きたのぢれは道物主が畜寐をする暇に酒落に拾らへたのが生きたのぢや」　足輕「何を言やアがる此の老爺いは」　一刀「其驚に似て居る

から足々疎といふのぢや又足輕かる〳〵空腹がる鐵砲持たせれア重たがる便當持たせれア喰ひたがる部屋へ歸れア眠むたがるといふのはにらい口輕ぢや」　足輕「御同役みれは發狂老爺だがる尽しで酒落て居やアがる、名前は何んといふ」　一刀「伊豆の老爺ぢや」　足輕「いやな奴ぢやアないか、何んにしても播磨先生へお取次、れに控へて居ろ」　一刀「宜し〳〵分つた」柴田「何に某といふ足輕が驚て此方に參ると暫時今立會ひが中止休憩につて居ります、それへ參りまして　柴田「飯田様に申上げます播磨が「オヽ何んである」　柴田「伊豆の老爺が參りました」播磨「何んだ伊豆の老爺とは」　柴田「何んだか知りません最初一人の若者が參りまして二十里先とか三十里先とか此の立會ひのあるこを聞傳へて參つたといふので名前は何んと聞きますとエヽ何んだか忘れた御同役何んと云ッたッけなア」　足輕「さう

さ巫女見たやうな名前だ」柴田「さう〳〵神子上典膳、今一人の何んだか妙な老爺は我々を捕まへて足々蹠なんていひまして名前を乳公申さぬに播磨にいへば分る愚問〳〵」すると頭をヘリマるんと酒落をいひまして伊豆の老爺〳〵と申しました」聞くより播磨が扨ては思つたが爲めに新庄近江に會釋をいたして暫時御免と其の席を立ち千石を取る其の人が供をも連れず唯だ一人、尤も當日は行司役をして居るゐと故股立を取上げ素足に藺草履を穿いたる儘に足輕と共に二の丸お馬場の木戸際まで參り見れば驚く伊藤一刀齋久景先生、播磨はうれにヒタリと平伏して　播磨「イヤ是れは先生何してゐれへ御尊來……驚いた足輕か」「ソリヤ大變だ飯田樣が彼の通り地面に手を突いて居る同役ゐれは手討になるぞ伊豆の老爺〳〵」といつたがうれぢやア伊藤一刀齋先生かゐれは〳〵」と足輕は面目なげにう

れに平伏しました其の時に老人が」一刀「コリヤ〳〵お前達はうれぢやから無闇に人の惡口を言ふもんぢやアない、播磨殿尊ね來たつた」播磨「宜うゐう御尊來に相成つた、此の近邊まで先生が御出でに相成つて居るゐとは播磨更に心得ゑ失禮を仕つりました、して夫れなる御人は」一刀「ゐれは伊勢の國の住人上總の東金に足を止め年は若いが中々能う使へる」と先生の一言此の時神子上は若年ながら後に至つて德川家に仕へ將軍に劒道御指南を申上げた人物禮儀作法も最と正しく致して　典ゐれはお兄弟子で在らせられまするか師匠より御尊名は疾より承はり居りました」播磨「先つ〳〵是れへ」といふゆへ松崎將監が來る、新庄近江も伊藤一刀齋先生が來たと聞いて喜ゐんでそれへ出迎ふ以前に麹る足輕は面目なげに一同うれに座して居ります　播磨「先づ〳〵兎に角も一時御休息」一刀「イヤ〳〵

休息はせんでも宜い早う其の場に乗込んで若い人々の立會ひを見るも樂しみ興勝も勇み立ち願はくは今日其の儘へ早々播磨戻りまして太守直治公に上申をする、殿樣もお喜ぶあつて直治扨ては其方の師匠一刀齋先生であるか」と御叮嚀のお言葉にお席をお離れ遊ばして御自身とお草履を召され五六間前まで御出迎ひ伊藤一刀齋は最上の大守は斯くまでの御名君であるかと恐入つて御會釋申上げる跡に扣へた典膳もうれへ平伏して御挨拶申上げる、直治公は老人あれへ」と自ら一刀齋の手を取つてお馬見所のお席へお据へになる、此の時今日を晴れと何れも來たつた人々が伊藤先生が御來場と猶更勇み成るべくは此の大勝負をモウ三日も日延べを願ひたいといふ家中の面々七八百人が鯨波の聲を揚げるばかり伊豆の伊藤先生がおいでになつた、天下の奇人非凡のお方がおいでにあつたと實に神か

佛の如くに拜敬する兎も角も今日は日も西山に傾げば立會ひはあれまでとして尙ほ三日の日延べ明日よりは伊藤先生に充分勝敗の檢視を願いたいと家中の人々の依願、其の夜は飯田播磨が自分の屋敷へ二人を迎れ上よりお手當充分に饗應いたして明の日は夜の明けぬ中から家中の面々馬場へ出て立會ひを拜見いたす、何れも腕を振つて立會ひをせんと四方に扣へます殊には何れも劍道の達人ばかり續いて柔術とても同樣唯だ其の中に弓術砲術のないばかり、此の時大抵な人は早く勝負を決けて仕舞ひまして九ツ時より八ツ時までの間に何れも達人の立會ひをする出羽守直治公は實に伊藤一刀齋景久が當城へ來ねゑりしは此の上もなき家の面目とお喜びに相成る愈々刻限になりまするとお双方に指圖役又は世話役といふものがありまして名を呼上げまする東の方より小山隼人西の方より大竹庄

之助と申出します、此の折太鼓役といふものがあつて徐波急三段に打敵たきます此の立會ひに隼人充分の勝を得ます、ろれより二、三番立會ひがありますると此のたびは矢張角力にても間機大三番或は十番取といふのがあります、負たる者はズン〳〵下り勝つたる者は其の場所を下りません此の時七番目の立會ひに相成りまするとは是れぞ上州笠輪の住人上泉伊勢守の門人にして丸目蔵人の門人でありますす所謂上泉の孫弟子に當ります奥山孫次郎此の人當年歳二十八歳中々神陰流の達人でありますす殊に力も充分にありろれへ出でます此の相手に相成りましたのが最上公の藩中に致して内田喜内、此の人も神陰流でございます同流のゆえと故ろれへ出ました礼正しく聽て孫次郎喜内挨拶終つて後取上げまする竹刀、二三度打込む中に中々孫次郎の早業は天で三合地で二合沈んで受くる虚々實々千變萬

化を尽した早業中々喜内を手許に入れません、其の折孫次郎は喜内の跡を狙つてお面……と打込む、喜内跡に下つてドタリ尻餅を突きましたといふものは向ふの力が強うございますから所謂力負けといふので其處に尻餅を突いて仕舞ひますドッと一同に聲を揚げましたが同藩のゆえと故最上公の藩中何れも悔しがつて居ります、ろれは實に尤もな話、爾か致しますると奥山孫次郎が高言を吐き「お世話役に申入れます願くば何うかモット充分御熟練の方とお立會ひを致したし今日は勝敗は伍格を是と致したい去すれば免許以上のものと目録のものとの立會なぞは更に面白うなら目録は目録、免許は免許何れも左様お立會ひを願ひたい」旨ふにや及ぶと松崎將監餘り孫次郎の一言が恐うございますから跡に出しましたのは相木仙助と申しますろれも中々能く使ふもの、ろれがろれへ出でまする、負ける松

崎將監の弟にして松崎大造といふものがあります、此の大造が出れば伍格の勝負に行くと家中の者が喜ぶんで居ります、去れば三番、四番、五番、最早六番まで負けて仕舞ふ如何にも殘は念なことでありまする直治公は、今日は奥山孫次郎の爲めに臣等一同に打たれる此の上は播磨御身が出でゝ然るべし」との御沙汰、此の人前にもちよつと述べ置きました通り千石頂戴をして御政治のことに關して居るお役人撃劍家といふのではありません固より伊藤一刀齋殿を尋ねまして十代の折柄修業をして歩行いたもの此の播磨守武俊といふものはうれへ出ます家中の面々最うあれなら大丈夫と聲を揚げて喜ぶ其の時奥山孫次郎は何百人でも來いといふ樣子其の擧動の面惡さ播磨武俊はあれで自分が負けた以上は當家の恥辱なり若しも彼奴に打

込まれたる時は即座に切腹いたして相果てんとまでの覺悟其の時伊藤一刀齋があれを見て居りましたが　一刀「ア、今日は播磨の樣子が少し惡い」總て武藝ばかりに非ず何藝でも人間は其の日の氣合にあるもの、朝より今日は立會をすれば必ず勝つ今日は立會をすれば必ず負けるといふことが誰れも己れの心は己れには分らんがあるもの、どうも播磨の先祖よりの擧動が惡いと小音にて獨言傍に居りました神子上典膳が「先生不可ませんか」　一刀「先づむづかしからう」　典「左樣でございますか何處を以て夫れが知れます」　一刀「イヤ〳〵お前には知れん、げれども立會つて見ふければ分らんがあれか勝では播磨が怪我の勝といふもの所謂僥倖勝だ」　典「ヘエー」其のうち双方支度、然るに奥山は最上家に於て飯田播磨守といふては腕前は確なり此奴容易なことではいかんと考へ、双方ろれに竹刀を差置きます

挨拶終る間もなくエイと立上つて打入りましたる時に奥山孫次郎が直ぐに付入つてパラ〳〵ボーンと向ふの面を打ちました所を播磨がヒヨイと体を躱はしたので充分に打込んだと思ひきや左に外れましたるから南無三仕錯つたと奥山が跡に三尺ばかり飛下りました途端に武俊かエイと拂つた一刀奥山が左の小手先をポカッと打ちました　行司「勝負はあッた」と行司役が旗を揚げました時に孫次郎は　孫「まだ〳〵」と申しました、行司役か「イヤ勝負は決きました」　孫「イヤ〳〵勝負に相成りません今の打小手は卑劣な打方である拙者の打込んだる面は充分体を躱はすには躱はしたが打込んで後体を躱した充分のみれは拙者お最初の勝てござると強情を張る、然るに中々行司役とても爾う最初のみとから覺べて居られませんが爲めに行司「イヤ先刻は御身が打込んだのを播磨が体を躱したに因つて

御身の竹刀先は他へ外れたので決して先刻打込んだのではない今確に播磨が打込んだ左の小手先に御身は充分打れた」孫「イヤ打たれない」　行司「イヤ打たれた」と爭ひになる、伊藤老人は唯だ眼を眠つてゐでなさる、松崎將監が「伊藤大先生只今のこれを一々申立てる時は抑々最初の掛方からして立上る所より以て勝負を決けなければならん却て奥山氏強情を張れるよりかみれは伍格として老爺にお任せ下さい」　孫「默り召れ御老人仮令伊藤先生にも致せ其の御一言は拙者心得ません打れたるものを打れないといふやうな奥山孫次郎ではござらん抑も拙者が師匠は上泉伊勢守の四天王と唱れたる丸目蔵人其の門人たる孫次郎でござる卑劣な勝敗は致しません、今一本……」　所うなつたに因つて仮田播磨は「左様ならば致方がござらん今一

本お立會ひ申さうと言ばれたに依て行司も「實に尤もだ左樣したすが宜からう」といひ、家中の人々も餘り孫次郎の高言が思ひ思つて居りますに因て「尤もだ充分お立會ひなさい」ワッ〳〵と一同聲を揚ました双方本お美事におやんなさいとは雙り注意いたして身体を守りまする、扨て總て刀を以て人を斬るといふのは後のゝと斬られないやうに致して身体を守るを以て良しとするゝれは最初の劍道極意の歌で概略お了解になつて居りませう、先ず先ど少し搏へ方も進ふ樣子其のうちエイヤと聲を揚げポン〳〵打合ふ双方必死に相成り眞劍同樣氣合を掛けて打込み打込まれまする中に突然奥山孫次郎が拔被つたる大上段此の時播磨武後は正顔に岩けましてヂリ〳〵と附入ります、附入られる奥山がトッ〳〵二間半程後み下りました餘り跡に下り力が強過ぎます故家中の面々〳〵」○「既大丈

夫だ」△「播磨先生だ」×「飯田大先生だ」といつて、居る、一刀齋が「ホイ仕舞つた」と手を叩いた、神子上がハッといふ冒蔭、人が「何んだらホイ仕舞つたといふ聲は……」其の途端でありました奥山が振り被つたる上段を「エト」と下に卸しますると、逆に左からポカーッ面を打ちました、大力ある奥山の爲めに打たれてヨロヨロ〳〵踏眼ける途端を今一本ポカーン……播磨は「参ッた」といふのも殘念だが仕方がない、此の時奥山が「行司役又最上家の御藩中誠との立會ひに至りなば此の如し、如何でござる、ゐれにて充分お分りになりましたらうかッ〳〵」と大きな聲で笑ふまだ年若な播磨故に齒噛を致して殘念と心得たがゐれも仕方がない、此の時奥山が」孫「ゐれが第七番の立合ひ成るべくは今三番にて十番とゐる最上家の御藩中にて播磨殿よりモソッと優つたお方はでざらんか」奥山が益々高言を吐くが此の最

上家に於て此の人丈けに立會ひをするものはない、茲に最上家の劍術御指南番となつて居りまする人は竹原丈助といふ人、此の人は既う老人にして唯だ劍術の古實の話をするのみ竹刀を執つたり木刀を執つて教へるといふことは出來ませぬ、此の人不幸にして子はなく又門人の中に跡を繼ぐものなく唯だ御指南番といふ名目丈けでございます、飯田播磨守は度び〳〵申すやうでございますが當家の御指南番ではない、けれども腕前は此の人が第一といふ、此の人が負けたるが爲め誰れ一人として出人がございません」孫「愈々お立會ひをなさるお方がなくば今日は先づ見れまでゝあらうか」と孫次郎が言ひましたる時に典「イヤ奥山暫らく、行司役其の御方は其處をお下し下さるなと拙者が……」と大音揚げたのを家中の一統誰れならんと見ますると伊藤先生の後ろの方に先刻から拳を固めて居りました神

子上典膳、一刀齋が「コリヤ若年者出なよ〳〵」といふ、中に」典「イエお師匠樣餘りの高言、私しお出て參ります」一刀「アヽ出てるか仕方がない、奥山殿此の者はまだ劍道未熟のものゝお待遇ひを充分」と老人丈けあつて向ふ花を持たした、孫次郎が莞爾と笑つて」孫「宜し〳〵御修行者とあらばみれへおいでなされ、神子上とやら典膳とやら大層お名前は立派だ、サア遠慮あくまお打込みなさい、面でも胴でも小手でもお好きの所をお打ちなされ」典「無禮な御一言だ御身は九目の門人とあつて先刻の廣言大日本の中に神子上典膳あるゝとを存ぜぬが、思はぬ最上の家中が一同に笑ひ出した」家中「ヤア大變お天狗大日本の中に神子上典膳あるゝとを知らんか……」双方互に何にか惡口を仕合つて居る樣子うれはいかんといふので行司が止めて愈々立會ひになる間もなく神子上典膳が手許に躍込みをすると奥山孫次郎

の、竹刀の柄を握る孫次郎振り放さんと致したが大力無雙の孫次郎もあれにハ難ろいた典膳あれを放さずエイと引く奥山は前にヒヨロ〳〵前に引かれましたが爲めに二間ばかり出るやつを共に下つて神子上典膳がヒシッ……と打つたアッといふ中にドサーッ奥山が尻餅を搗きましたサア邑處でございます向ふのものを前に引いた終には自分の身体が前に過むもの向ふを前に引きながら自分が一間程跡にトッ〳〵〳〵下ッたといふのは是れが玄妙、生れ付いての早業、一刀齋が「エイ」と仰しやつた、尻餅を搗いて起きやうといふ所を今一ッポカーリ」

典、奥山氏あれでも若年者か修行人か神子上い神子上、典膳、腕は此の如し」と又一つポカーッ……一刀齋が「もう宜い」と仰しやつた其の時最上の家中の者がワッと聲を揚げ拍手喝采喝りも止まや寫に奥羽第一の出で羽富士も崩れるばかりの喝采でございます、諸釋師の言ふとは大層な豪傑が寢て居ると其の鼾雷の如く、死骸は積んで山の如く、血潮は流れて海の如くなるいひますが斯うなくては強い所が强く見へません、げれは講談師の嘘……神子上が大勝利を得ました、此の時奥山孫次郎が定めし先刻の通り强情を張るか又はあれを遺恨に心得て神子上を怨むかと思ひきや流石は上泉伊勢守の門人たる丸目の門人丈けあつて立會ひの時は立會ひの時として孫「成程いつぞや敵人先生が言つたが總て藝といふものは己れと伍格と思つたものは已れより二段上手のものだ、吾より上手だと思へば先は五六段も强いもの、自分より下手と思つたものが自分と同じか若くは自分より一段上手のものだと孫々仰せられたが此處の事だ」と覺に滿心の天狗の鼻を折りまして一刀齋の前に手を突き」孫「先生の御門人神子上氏の先刻の

早業なれなん先生の御妙手恐れ入り奉つた」一刀「オヽ流石は九目の弟子奥山孫次郎分ッたか、アレは俺は教へんが唯だ典膳が生れ付いての彼の早業面白し〳〵、併し今日は若い人の立會ひ誠に感心〳〵」一刀齋若い折は中々御身等の如き器用には遙らなんだ、併し飯田播磨は播磨丈け仮令二度目に敗を取ると雖も總ての手練人に指南をすべき所の位ぬあり一同感心」と流石は老人ろれに居列ぶ立會ひをした面々に一つとして非を打たれんで感心を爲されたといふのはお腹の中にはまだ〳〵子供達が何をするかと思つたが流石此の先生最上公の御藩中に心を取直させんと斯くの通りの御一言……さうして此の折飯田播磨の立會ひに二夕所一刀齋先生の見込んだ所がありまして、うまで一刀齋先生當城下に神子上典膳と共に御滞在なさる、奥山も同様二ケ月程一刀齋の側にあつて武術の玄妙を聞き別れて

此の人上州に行く茲に最上家に於て飯田播磨守武俊は一刀齋に就いて再たび修行を爲し此の人後に最上家の御指南番と爲るろれは末のお話し、扨てろれまでは唯だ神子上典膳が修行中の年若き所ろのお話しでございましたが抑も此の講談の標題の如く瓶割典膳といふのは如何お處ろを以て言ひ出しましたかろれより典膳が善起を斬るといふ瓶割の傳記次席に申し上げます

第八席

扨て飯田播磨守武俊といふ人は至つて温順柔和お人でありまして、殊に新庄近江といふ最上出羽守公の重役が悉とく此の播磨に眼を着けて居ります、此の度一刀齋が當城に來たりしに因つて太守直治公より召し抱へたき御沙汰もありました、思ふに因つて伊藤先生ろれを辞します、うまで一年の間だ然か

ちば富城に足を留め家中一般の人へ一刀流の指南を致し呉れるやうと御願みに相成ります、己むを得ぬ場合、殊に一刀齋氏は我流を遺し置いて然かるべき人は大抵門人の中にてもゐ眼を着けてゐいでなさる、去れば神子上典膳は何處までも一刀流でございます、小野派一刀流と申しますのは此の神子上典膳にあらせして典膳に子が両人ありまして惣領に名を繼がせまして忠也といひ、次男を次郎右衛門忠常といひました、此の次男が小野といふ姓を繼ぎました、うゑで小野派といふものは次男が擴ろめたのでございます、二代目の典膳は唯だ一刀流でありまして茲ゐに亦たゐ断はりを申して置きまするのは誰れでも此の神子上典膳が小野善鬼といふものを斬つた、うゑで自分の兄弟子を斬つたが爲めゐ假令ひ師匠の命とはいひなゐら心ろ許なく心得て斬り殺す時に「師の命は獣止がたく御身の一命を取る

が其の代り御身の名字を此の典膳が繼ぐ」と云ふ一言を遺ゐして討たれたる善鬼もゐれを喜ゐんで息を引取ッた、ゐれ故に神子上改ため小野次郎右衛門となつたと、斯う述べまゐ講談師先生が多くでございます、併しゐれも其の情は面白く拵らへてありますが、實際を調べて見ると決つして神子上典膳は小野次郎左衛門ではありません、小野次郎左衛門は即はち神子上典膳の子でございます、尭ひに三代目にして小野派といふものを一派拵らへたして見ると自然に一刀齋の術が幾分か薄くなりました ものでございます、併かし斯ういふゐとは何にか議論に渉りますから略します、うゐで其久老人か飯田播磨と神子上典膳の両人は見込んだ弟子でございますから何所までも只だ一刀流で通すといふ、尤ども飯田は後に飯田派一刀流といふ飯田といふ名を付けたのは播磨の悔からでおざいます、

ゐゝで城内に伊藤一刀齋のふ小屋といふものを賜はりまして
うれに一刀齋は神子上と共に足をお止めあさる、三度〳〵悉ど
く最上公からお手當て充分、併し老人は美食を好みません自
から好んで麥飯を焚かせてゐれを食し、又た厨房事萬端は典膳
にさせる、其の間だ播磨は日々一刀齋の住はれるお小屋に參つ
て神子上と共に車の両輪の如く鳥の両翼の如く左右にあつて
能く働きます、扨て毎度劒術の談柄に申す通り只だ道具を着け
てお面お小手と打つばかりが稽古にあらず、座はつて居ります
る内も一々指圖をなさる、爰ゐに一ケ年足を止めて御いでに
ありますす處ろへ或日尋ね參りし一人の修行者一刀齋のお小屋
の前にお弟子の家樫原忠兵衛、井上才九郎といふ両人が居りま
す、或る夕景に」修行者「御免下さい」忠「ハイ」修行者「伊豆の伊藤先
生は當ふ小屋においでなさるといふことを承はりましたが

左樣でござるか」忠「如何にも左樣てで、ざる貴殿は……」修行者「
手前は一刀齋門人小野善鬼と申するものでござるお取次を願
ひたい」忠「暫くお扣へ下さい……先生へ申上ます」一刀「オイ
何んぢや」忠「小野善鬼といふ御人ゐいでにゐりました」一刀「
オヽ善鬼が參ったかアヽ爾うか斯りや〳〵典膳よ聯てお前に
も話した善鬼が來たぞよ」典「ハッお兄上がゐいでゝござるか
一刀「取次〳〵」と師匠の言葉に神子上がそれへ參りまして」典「
ゐれはお兄上でござりまする手前ゐとは神子上典膳と申し
て伊藤先生の門人でござります」善「お兄上」
とは何ぢや汝如き弟子は持ぬぞ」一刀「コリャ〳〵善鬼よ」
善「ゐれは先生御免下さるやう此の若者は何奴でござる」一刀「
コリャ〳〵爾申するな夫は神子上典膳といつて伊勢國の住人
不圖した所から上總の國にて我門に入たる者なりゐ前の爲に

は弟々子爾無く申すあョ」善「ハッ左様でござりまするか」既う此時に自然と小野善鬼が言葉に針を含んで居る、尤も總て斯ういふふとは有りうち自分の弟々子が出來ると自然と兄振といふのがありますが夫は小量の至り、兄でも弟でも師に仕るときは一体にして兄たり難し弟たり難し、それを心掛るが當り前でございますが扨は人間は左様さわらんもの……其中草鞋を脱いで小野善鬼が昇る、弟子の兩人が」忠「オイ〳〵才九郎嫌な奴ぢやアないか」才「ぢやが併し強さうな男だ」忠「成程神子上さんや當家の飯田さんなどよりは少し強さうだ」一刀齋が「善鬼何處に參ッた」善「城に先生面目もなきふと長年の間先生へ御無音いたした段平に御勘辨に預りたし」一刀「アヽ宜〳〵併し俺は最ふ前は無きものと思ふて居た少しは心が直りしか」善「恐入ますといふものは誠に此小野善鬼といふ者は酒を好女を好

み平生身持放埒、併し豪勇にして其の刀術は最も妙を得て居ります、老人が「古藤田掬解由左衛門といふは一時別れて武藏の地に這入り大池源太左衛門といふものは出來たか扨て〳〵皆ふ動に及ぶものはない、此の神子上に見所があつて連れ參りし者兎に角今夜は此家に一泊いたし明朝あなれば飯田播磨に頼んで當城主にお願ひ申さん」善「ヘイ有難うございます」扨て其の中夕飯も出來てふれを食さん神子上典膳も串鄭寧に挨拶をいたし又善鬼も以前に聲つて言葉も柔らさ大きに典膳を喜び其の夜は三人寢て仕舞ふ翌の朝になりまして飯田播磨が來たる播磨も小野善鬼に始めての對面、ふれも弟々子のふと故に一々ふれから先のふとを頼みス兄弟の義約を致しました、其の日に始めて一刀齋が小野善鬼の今まで不埒なふとを許しました、新庄近江の許に參り云々申立てる、近江も喜び早々出張いたし此

處で四人となつて酒宴扨て其の翌る日から善鬼も共に御家中一般の人に大層劔術を教へ能く教授いたしまする、然る所が伊藤先生不圖風邪を引いて心地が惡い夫れから少し重く相成つて丁度四十日ばかりの間のお煩ひ、お側に在つて善鬼、典膳、播磨の三人が代る〳〵夜分も寢ぬに御介抱申す、門人の心が通じたるか又は藥の利き目か伊藤先生も段々心地好い、爾う斯うする中其の年も既う十二月の末になります、兎角出羽奥州は雪も烈しく或夜のふと九ッ半過ぎ一刀齋が目を覺まし水一杯が飲みたさに傍に寢て居た善鬼を起さうと思ふとふれは熟睡いたして居りまして高鼾、神子上が居りませんから扨ては厠へでも參りしふと〻待つて居れとも歸らん、善鬼を起して水を酌まんと心得たがイヤ〳〵熟う睡て居る者を起すも不憫やと自分で水を酌まんとお立ちなされる、襖を密と明け樣側に出る、向ふ厠と

申した所がはんの水瓶一つに柄杓一本小家の盛所も同じふと れへ來たつて水を飲まうとするとヒユウ〳〵と戸に當る風 一刀「アヽ能う又吹いて居るワ」と獨言、ふれに宵の程から雪が吹つて居りますが爲め 一刀、まだ雪が降つて居るかと密を密と押明けてヒヨイと庭を御覽なさると吹雪でござりまするから恰で向ふが見へない位ゐ、然るに向ふの井戸際でドッ〳〵といふ水の音 一刀「ハテお水でも浴びて居る樣子ぢや」と雨戸の外へ半身を出して御覽ぬさると吹雪の間〳〵にチラリ〳〵と見ゆる姿、ふれぞ神子上典膳なり、素裸体に相成つて此の寒風を厭はぬ數百杯の水を浴びて只だ一心に神を念じ佛を祈り「師匠景久先生病氣平癒一日も早く全快をさし玉へ」と念じて居る聲、思はぬ一刀齋が涙を飜し「アヽ不憫やまだ年若ゐ典膳は扨ては水垢離を取つて居るか」夫れへ參つて止めやうと思召たが」一刀「

イヤ〳〵恵じ生中、自分の師匠にも言はせして水を浴び神を祈り佛を祈つて居るものを却て止めては本意であるまい」と張知らぬ顔でお休みになる、弟に引替へて兄の善鬼はゴー〳〵と高鼾き一刀齋が「アヽ此れを見るに付けても思ひ出すまだ年若にして門人とおつても其の緩海き神子上典膳、善鬼は幼少より手許に置いて武術を仕込み伊藤の家を繼がせんと思ひしが彼奴劍道に慢心して修業を止めそれに身上は惡く惡くい奴」と思召したが其の儘にお休み扨て夜が明ける平生の如く神子上は早く起きチヤンと彼處此所を何にくれとなく片付けまして師匠の枕元には藥は申すに及ばず總ての物を持運びろれまては兄弟子善鬼を起さぬ、ろれに飯田は機嫌を聞きふ來るが扨て同じ弟子とは雖も仕官の身であります、するに因つて爾う始終一刀齋先生の側にばかりは居られぬ折々病氣を見舞ふのみ其の中典

膳の水垢離も三七二十一日の間で滿願をいたしで其の利き目もあるか一刀齋の病氣全快、然るに既に最上の城内に居るあと一年の餘も過ぎて仕舞ひましたから兎も角愛にて當國を立ちろれより又もや北の端までも廻る思召し或日改めて典膳、善鬼播磨の三人を側に呼んで　一刀「サア三人の者既う一刀齋は是れにて近日當所を出立いたす、ろれに付いては當所には此播磨武俊が殘り神子上は俺と共にまだ〳〵劍道末熱ぢやに因つて連れて參る、善鬼は今一遍修行を致して一日も早く何れにか主取りをせへ然し小祿ぢやに因つて行かん大祿ならば抱へられるといふ其の賤しき心は出すお仮分大祿と雖も君〳〵たらば臣〳〵たるもの能く〳〵心して自分の心に稽まる主を取れろれに付いて明日はお前達三人の者へ尚は改めて此の一刀齋が贈る術もあれば左樣心得ろ」いはれて喜ぶ三人の者、愈々當日

になる飯田播磨武俊は善鬼と典膳との先づ間の弟子でございます、されは最上家の生涯仕へるみと故に此の一人は一人として乃術の玄妙を讓りました、扨て此の術のお話でございますが能く講釋師が斯ういふ術を讓つた、アヽいふ術を讓つたといひますが夫れは知るべきものではありません、夫れだけの極意まで知つて居るから何にも軍談師をしないでも宜さうなものであります、されは人に讓りますには其の許しがあるもので何んぼ見て來たやうな嘘を吐くといつて總て術のみとを委しく知るものはありません、併なぜら眞玉が此の講談を演じるに付いては武藏流祖祿或は武藏詳傳等を拜見をしましたが少しはされに附會説もあるやうに心得ます、夫々劍道者又は鎗術の先生柔術の達人等に付いて種々お話を聞きまして何分か營業の材料にもならうかと見たり聞いたりしたる所を以てお話をし

ます、法螺を吹く講談のやうに面白くはありませんが是れは實際を申し上げます、扨て其の日の夕景になつて神子上典膳と小野善鬼の二人を呼び一刀「サア宜いか今爰で俺がお前達兩人の中に讓る術あり斯樣せい」と仰せられまして丁度一刀齋殿が借受けて居る家に一つの衝立がありました其の高さは漸々三尺位なものでありますうれを自分の居間としてゐいでなさる六疊の間と其の次の八疊の間のあひだの所に置きまして居間の内に一刀齋が扣へて兩人は衝立の外にあります　一刀「サア宜いか兩人此處で乃公が柏手を打つ其の音を聞きなば衝立を飛越して這入れ先へ這入りし者へ極意の中の極意を讓る宜いか」委細承知と小野善鬼がナニ典膳如き所の小僧乃公は乃公なりといふ顏附兩人は八疊の間の向ふに中腰になつて居ります神子上は迚も及ばんと心得て居りましたけれども師匠がいふ

には總て藏道には上下の隔てはなし又貴賤の差別もない弟々子と雖も兄に遠慮は要らんといふお言葉があつたが爲めに兩人息を凝して待つて居ります、尤もうれを誰れも見て居るものはない實にシーンと致して居る纏て衝立の中に先生がパチン〳〵柏手を三ツお拍ちなされたパラ〳〵ッと駈けて往つて小野善鬼がエイと衝立の中にヒョイと飛込んだ一歩後れて神子上がパラ〳〵ッ駈けて來る衝立の上にヒヨイと足を掛けてチヨツと中を見て飛込んだ一刀齋か「宜い」と仰せられたから善鬼か「サア先生仰せの通り此の善鬼先へ飛込みました極意の中の極意といへば一歩進んだものサア此の善鬼にお譲りを願ひたし」一刀「イヤ不可ん」善「エイ」一刀「うれは神子上典膳へ譲るイヤサ忠明に譲る汝は兄弟子にして劍道は弟弟子ぢや善「されはしたり先生兄弟子にしても劍道は弟々子とは如何お

又先生ともあるべき御方が二言をお遣ひなさるか」一刀「何んぢや」善「今何んと仰せられた先へ飛込みし者へ其術を譲ると仰せられたではござらぬか一歩も二歩も先へ飛込んだ此の小野善鬼殊に神子上は衝立を飛越へる時暫時衝立の上に足を止め稽古んで飛込んだのは未だ其の術に至んのでござる」一刀「默れ、其の方は扨て〳〵よれを俗に申せば向ふ水即ち味方を知つて敵を知らぬ又敵を知つて味方を知らぬといふもの今此の衝立の中に汝等が師たる伊藤景久が居れば宜いが此の衝立を敵と味方の境界となし此の衝立の中に敵は得物を携へ或は飛物を携へ計畧を以て敵をよれに飛込ませ不意に打つたら何んとする其の方は唯だ此の術を譲受けたく衝立の中へそ師なり〳〵と思ふて居れば氣が緩んで飛込んだ、神子上は飛損じたにあらぬ衝立に足を止めて此の中を見しは師匠たる伊藤景久に

は思はぬ衝立の外の地なりと已れの身を守り八方に眼を配り俗に申せば石橋を叩いて渡るといふ是れ身を堅固に致すの術にして總ての擧動神子上典膳は汝より遙かに優ッた腕汝如き向水には其の術は讓られぬぞ下れ〳〵小野善鬼　善「恐れ入り奉つッた」と口へは言へど心にはエイ殘念だ　一刀「去らんか」善「ハッ」仕方がおくバラ〳〵次に下りましたお師匠様の御言葉兄弟子を差置いて　一刀「イヤ〳〵苦しうない人間は老少不定一刀齋は何時死を遂げるも計り難い此の術は汝に讓る善鬼次席へ下れ」言ひ樣ハタ〳〵〳〵御自身と立つて唐紙をお縮めあさる其の中へ入れて何やら神子上典膳へ口傳の一手二手授いて平生お携へになつて居る大きな圖太袋より取出したる所の抑も富田流より出で續いて其の奥儀を究めたる鍾馗自齋ふれは一刀齋先生の師なり其の鍾馗

流より粹所を取つて我が極意としたる一刀流の玄妙の卷物ふれを神子上典膳に開かして一々小音にて御傳授　典「ハヽア恐れ入り奉つる」と推し戴いて神子上が其の卷物をクル〳〵と紐を締めて居たる途端唐紙サラリ押明けて突然手を差延べ其の卷物に手を掛ける神子上が「ふれは兄上……」といふ間もなく其の卷物を握つて表へ駈出したる小野善鬼、一刀齋は立腹して一刀「典膳斬れ、討て、ソレ彼を斬れ　典「ふれはお兄上理不尽ふるとでざる」ふれを見るより小野善鬼が最うふれさへ奪つて仕舞へば師匠も何も要らんふとヽ振向きもせず表に駈出す一刀齋は立腹なし老人ふがら其の足早く追駈け參る神子上も共に追駈ける典膳の量見では兄弟子の必得違ひ傍に行つて諫言せんといふ中に跡振向いた小野善鬼足早にして師匠一刀齋に樣々の惡口神子上典膳を侮つて凡う道の四五丁も駈出すふれを

一刀齋と典膳が追て參りましたるが竟に場所を見失ふ　一刀「アヽ残念や」神子上典膳が「お師匠様兄弟子を差置いて弟々子の典膳が奥儀の宝物を頂いたが爲めに兄上の御立腹兄上に代つて私がお詫を……」　一刀「イヤ〳〵　假令汝が何んと申すも勘忍ならん、何方へ參りたるかといふ中向ふより一人の農夫が駈けて參りましたから　一刀「コリヤ少し尋ねたい今斯様〳〵云々の人物は何方へ參りしか存ぜんか」　農夫「ソリヤア此先の紺屋の六兵衛どんの家へ逃込ました」　一刀「ナニ紺屋の六兵衛とやらへ逃込しかサア典膳追込ません」　典「扨まつた」と最う致方ない師匠の命追駈け參りまして表の戸をガラリ明ける紺屋の亭主は周章ただしく　主「ヤイ〳〵　お前様お兩人は何ぢや今頃、盗賊が人の家を不意に明泥坊でもさッしやるのか」　一刀「イヤ〳〵今是へ確逃込だ者が有うな」　主「イヽヤうんな者はムりません

一刀「イヽヤ是れへ確かに逃けたけれども一刀齋無法に家探しは出來ません、すると紺屋のおとでございますから藍瓶がズラリット列んで居ります、其の真中の大瓶の蓋がゴトリ〳〵と音がした待てといひながら耳聾だてヽ一刀齋見ると瓶の中に人間の居るゝとは夫れは鶴の名人にもなれば寝て居ても霜の降るのも音で考へるといふ位」　一刀「ソレ典膳是れへ隠た怪くき善鬼斬れ、エイ斬らんかコリヤ」　典「ぢやと申してお師匠様弟の身分を以て兄弟子が……」　一刀「イヽヤ此一刀齋が命令に依つて早く斬れ」　典「ハッ……」　一刀「斬んかよ斬らぬは此一刀齋が……」　典「ハイヤお師匠様」此場に及んで典膳も師匠の言葉を背けば却つて不幸」　典「委細承知」　一刀「サア此刀を以て斬れ」と一刀齋大刀を典膳に渡す推戴いて典膳が瓶の側に寄り」　典「如何に兄弟子、小野善鬼殿御身は何故其やうなお心だ、手前と致して

御身は何處までも尊敬いたすに今お師匠様は典膳に術を讓れども此後御身に讓られる時節もあらん枚を曲て幹を枯らし角を矯めて牛を殺すといふみとは御存じなきか」流石は典膳の一言、木の枝も時なくして曲ぐるときは枯らして仕舞ふ牛の角も時おくして矯める時は牛を殺して仕舞ふかぜ時を待たんかといふ一言でありませう紺屋の亭主は果れて見て居たが「うれぢやア先刻戸がガラリとあいたが家に何か迷込んだのか」一刀「ソレ典膳」典「ハッ」言様一刀を眞向上段に振被つた神子上典膳が「エイ」ズハッと瓶は眞ッ二ッあなつて左右に割れる小野善鬼は此の時卷物を口に咬へて俯向ひて居りましたのが腦上から空竹割卷物を眞ッ二ッ善鬼の身体はドサーッ、實に不思義なるみとには神子上の腕の效か一刀齋の名劍か人間を眞ッ二ッに朝るのも容易ならんのに紺屋の藍瓶まで眞二ッにおつた、茲を

人呼んで瓶割典膳といふのが當り前の講談でございますが眞玉はかりは一つ反對の論を立てるといふのは實地のみとを書き著はした武術の本又一刀齋先生一代の履歴を確かめました故に是れより瓶割傳記の實説を申し上げます、何となれば何んぼ神子上典膳が名人でも瓶と一緒に人間は斬れません併し斬れるといふ方があります、が第一紺屋の藍瓶が可笑しい、紺屋の藍瓶は諸君も御存じの通りズット列んで脇に土を盛つてあるので、假に藍瓶が其處に一つあるうれが二つにズバリと斬れるなどゝいふ夫れらは附會説の甚だしきもので昔ならさういふ講釋を讀んで居てもアヽさうか樂いもんだと思召しませうが、段々人智が進んで近頃では十歳未滿の子供衆でも外史位は皆お讀みおさる位お其の中で斯んな馬鹿氣た法螺は吹けません全くは一刀齋先生が瓶割といふ一刀を以て神子上典膳に

渡し、典膳がこれを以て善鬼を斬つたのでこれは瓶割といふ刀の名であります又瓶の中へ入て善鬼を斬つたのではなく下総の國相馬の郡に於て計らずも此の小野善鬼に逢ひ此の時善鬼が身持惰弱から斬取強盗は武士の慣ひなとゝ強盗を働いて居りましたうれへ通り掛つた一刀齋、典膳の兩人斯ういふものを活しし置くときは全國の人々を後に如何やうな難儀醸すも計り難いと師匠の命にて神子上典膳が此の善鬼を斬つたといふ瓶割の實傳を是れより次の條にて委しく辯じます

第九席

今まで申上げたのが神子上典膳瓶割の傳といふのでございます、これは素と面白ろく拵へたものでありまして彼の鎌倉雪の下の住人刀劍鍛治五郎正宗其の弟子に彈九郎正近、彦五郎正宗喜左衛門村正などゝいふものがありまして湯加減傳授といふ

これが刀鍛治の一番むづかしい傳授であります、此湯加減の時を立腹して喧嘩にて師匠が外弟子へ讓る所を忍んで退入り其の領弟子ではありまするが不行跡の彈九郎に讓りません、これ湯加減を他から探りました所聞これは傳授を盗んだのであります、此時人間の手を入ましたるが爲めに湯が何分か殆たといふ非凡な正宗これを知て彈九郎の手を斬落しました、人呼んで後にこれを片腕正宗といひましたことがあります、又寛永の年間馬術の達人曲垣平十郎、向藏人などいふ名人があつて、尤も此向平九郎は一たび越前家に仕へ後に越前改易になりまして徳川に仕へ神田橋の御屁を預りました御馬乘、總頭曲垣仙之助といふお方があります此人の先祖でさうで此曲垣平九郎と向藏人が越前忠直公の御前にて六尺の塀を乘越へたといふことがあります、尤も馬乘でございます、此折向は先へ乘込み曲垣は後れ

て乘込んだ、矢張り神子上典膳と善鬼と同樣の論にて先へ乘込んだ方が却つて笑はれました、うれらのみとを附會はせまして此の神子上典膳と小野善鬼の術讓りの處よりうれに瓶割刀といふ刀があります、たゞ爲めにみれを何時の程か講談師社會が斯く面白く編りましたものか又は作者が拵へたものか知りませんが實際は決してさうではありません、併し眞玉一人が斯う申しましても看客諸君がイヤ〳〵彼は前に言つた通りが眞正だと仰せられゝば夫れまでのみとでございますが然るべき書物にもありまする故斯くは辯解いたします、決して紺屋の藍瓶を割つたのではありません、併し此の瓶割刀といふものは何所から出たといふと劍術の元祖たる天眞正傳神道流飯篠長威齋を割つたのではありますまいか、うれは下總の國香取の郡飯篠村の人で宗直と云ふ人有りますると申し幼少より致たして香取の神宮に仕へ棒の手號を山城守と申し

を能く學びましたもの、然るに其の棒の術より段々と器用な人でございますから刀を使かふみとを得又だは鎗術のみとにも玄妙を得ました殊に此の人には餘多の門人がありまして第一諸岡一羽、併し諸岡一羽といふ人は後に一羽流といふのを開きました、うれに塚原土佐守、松本備前守政信などゝいふ人があります、此の飯篠流より出てましたものにて富田九郎左衛門又は富田越前守、富田一放、此の富田一放は一放流といふのを開いたゝ、うれより續いて鍾捲自齋といふ、此の自齋が一刀齋の師匠でありまして、然かるに此の飯篠長威齋といふ人が或る時棒を廢して仕舞ひまして刀を使かひまするときに自然今まで棒を使ひましたるが爲めに刀を以つて向ふの足を拂ひ或ひは突上げるみとに妙を得て居ります、然かるに家直の考がへには刀を使ふのは棒と反對にいかんければならんと種々に心を碎き

長年の間上段、中段、下段といふことを考へました、尤とも鎗長刀等にも上中下段とあります、併かし鎗の上段といふて頭の上に振被ぶるものではありますまい、鎗を握るには左りの手は雛卵を握るが如く右の手は盤石を握むが如く左りは極く輕く持ち右は確乎と持たねばならぬもの、さうして鎗は突くより引くの早いが玄妙、上段とは右の手が少し下りまして鎗の先が上がります、眞直ぐに構へるこれを中段、右の手が上がり左りが下るこれを下段といふのでございますうこで飯篠先生が中段で物を斬るこどを頻りと考へました、上段に被つて斬り下すは容易はないが中段はむづかしい、併し何にを斬るにも矢張り上中下段に斬らんけりやアならん振り下ろして少し刀の及先が長いと己れの足の拇指を斬るこどなどがあります、ヤッといって腰の所ろまで下ろして此處で止める、其の止める所ころに玄妙

がありまするさうで或る時一刀を執つて先づ最初据切りと中しまして悉く藷へ藷を包みましてこれを置いて切ります柔かふものですから刻ね上るこれを一俵二俵といふのを纏どめて切るやうになるサクリ〳〵と切れる柔らかいものが斯くまで切れるやうでは樂に切れるであらうと或時樫の木の暴風の爲めに倒れました太き處を狙つてエイと切るサクッと切れましたが心地好ぞあつて刀を彷ちへ差置き切口を見ると怡て飽き掛けたる如くであります叉木の立つて居りまする所を切るには切り宜いものだが横になつて居るものは中々堅いもの、爰で堅いものを切るのに妙を得ました、然るに或る時爰に一つの瓶がありました、斯ういふものは切れるものか鐵はいつぞや切つて試めしたが何の苦もなく切れる、尤も鐵といふのはこれは、釜ださうでございます、これを二つに切つて仕舞ふ併し瀬戸物

の類といふものは中々あれは切れべきものではない二十八歳の折に其の瓶を己の庭へ持來たりまして据へました、尤も水瓶の如き深い瓶ではありません淺き瓶にいたしてあれは只今でも諸國で用ひまする彼の水瓶の如きの燒でございます何といふ瓶の名であるか又何にあれを用ふるものか矢張り水壺であります、これに向つて或日エイと切りました、切るとパラリといつて瓶は少しも切れぬして刀の刃をあぼして仕舞ふあれではいかんと其の刀を棄てました又一ケ月程經ち一心刀を持出だしてあれを切りました又刀が曲つて仕舞ひます、三度目にやり同樣、如何にも殘念なり樫の木まで斯く切れることに至つたがあれは刀の惡いのではあいまだろれまでに術が至らん腕が固まらんのであると此所で一ケ年程勤念いたしたが、併し何所までもあれを切らんければあらんといふ一心は強いもの、尤も

人間左もなければいかん、能く下世話の者のいふ言葉ですが乃公ア不器用だから出來ない、既ういけあいと物をやりかけて棄てゝ仕舞ふあれは不器用ではない無性なのでございます、人間として人のする丈けを學んで出來んものはありません、うあるとは西洋人は強い何が器物を發明いたす、又は機械を發明するには祖父の代に發明を仕掛けて出來ない其の子がやつて出來ない三代目になつて漸々考へたといふ遺掛けたものは捨てそに置くのは西洋人、尤も目今此の論が充分あります、うあで飯篠長威齋が三年の間頻りと切つて居る、名劍或は鈍刀に拘らずして切る、刀を何本折り或は齒を缺ぼしたか知れません、茲に戚時鹿島の神社に納まつて居りました一刀、此の刀は無銘であります、するさうで誰の鍛ちしものか或人の說にはこれい三條の小鍛治だといふ人があります、イヤ〳〵さうではない粟田口もの

だといふ人があり更にあれが分りません、備前ものだといひ、相州ものだといふ、其の刀を取つて既うあれで切れやぱ一時斷念をしやうあれにて刀術を樂てんとまで覺悟して、或夜でござります、夜中の月は冴へ渡つて銀盤を研ぎ澄ましたばかり、庭へ出でました、丁度夜の八ッ、八ッは丑滿といつて寥々く寂莫とする刻限冴へ渡つた月を眺め右の刀を以て庭にある瓶の邊りに參り、何んとなく月を見るに付けても我思ひ込んだるあとを究めんければあらんと……月といふものは餘り長う眺めて居ると無性を感ぜるもの、あれにて切れやぱ既うあれまでと一心籠めた庭前ビユウ〳〵と吹く風は處をつんざくが如し、右の刀を執つて瓶の傍に寄り、瓶の中に少しく水がございました其の眞中に月が映つて居る、其の月を的と致して、中段に構へたる右の一刀エイ……ズバッ……瓶は左右に二つに倒れる水は其の儘流れて

仕舞ふ、流れる水に月の映るといふ通は未思義と長成齋思はぬ、ハッと尻餅を搗きました、立ッて見ると瓶は眞ッ唯中から左右に割れました、月の明しで見れば刀疵もなく、瓶曲もなくあれふり〳〵といつて惜ぶ間もなく夜が明ける、庭よ立つて見れば瓶は二つになりてあれを合はして見ると少しも曲つた所はなく切れました、尤も其の刀は餘程長うございましたあとと見へる、既うあれで宜いと其の後は更に刀術のあとを捨てたといふ、おせ樂てましたかといふと既うあれまで……あれより上を究めるといふは命を樂てるまでにせんければならん、瓶の毒命は知れたるもの、吾一代に此の上の妙術は得られまいと言つてそれ切りにしてお仕舞ひなされた、其の刀が即ちあれを瓶割といふ、去れば此の瓶割刀といふのを富田九郎右衛門といふ者が所持いたしました、續いて段々と其の家に傳はり後に一時富

田の家は絶ねましたが、其の流を汲けた鐘捲自齋がゐれを所持いたしをりました、ゐれを一刀齋が此の刀術の玄妙を得るに因つて鐘捲自齋が死しまするときに一刀齋にゐれを遺はしたといふゐとでありまず、サー其の刀を以て瓶割といふ、ゐれは然るべき書に正に出て居りまず、尤も古刀名鑑新刀名鑑の中には此の話がございません、又或人に問ひましたら維新になつて最も諸人が敬暴いたしました山岡鉄太郎君彼のお方は德川の撃劍家にて最も御能書であらつしやいました、其の山岡さんのお家お瓶割刀があるといふゐとを言はしつたお方があらつしやいます、併しゐれは私しは拜見いたしません、ゐれは爾うとして此の瓶割の刀を以て小野善鬼を斬つたが爲めに瓶を割つたといふ説を拵らへたのが實際でございます、斯う申し上げまするとお餘り談が固くなつて仕舞ひ

まして、何にか演説めきまするからゐれを捨置き、茲に一刀齋老人神子上典膳を連れまして出羽の國山形をお立ちに相成る、ゐれより坂田城内は申すに及ばず出羽の國を暫くお廻りに相成つて又奥州へお出なされそれより段々と常陸國茨城の郡、水戸城下等もお廻りゐ相成つて久々にて伊豆に立歸りまず、ゐれには亦神子上典膳が「私くしも舊年恩を受けた上總の東金彼の久太夫の許へも訪問れたい」とゐれより水戸をお立ちに相成つて一刀齋氏が水戸から江戸に參るまでの道のお話は畧しまず、紹吉といふ所もあり又は土浦、彼の邊りゐは牛久、鳥手、藤代、我孫子に松戸などいふ所があります、然るに此の邊りに相馬郡といふがありまず、唯今の茨城縣下でゐれは下總の内……或る日夕景になりまして典膳を連れ原に掛からうといふときに典「先生大分空腹になりました」一刀「オ、左樣ぢや併し今宵は月夜であ

るから夜道をブラ〳〵歩行くも又一興ぢや」典「左様でございます」一刀「オヽ彼所に幸ひ飯を賣つて居る家があるあれへ這入らう……ハイ御免よ」立場の老爺さんがうれへ出まして「ハイ〳〵お掛けなさいまし」一刀「ふ酒を少々」老「ハイ畏まりました」御飯を食べ立とうとするから老爺が「シ〳〵御兩人さん今晩は此の原をお通りになりますか」一刀「左様ぢや」老「ヤーお泊り遊ばしたら如何でございます、斯んな汚ない所でございますが唯だお蒲團とお枕だけお貸し申しますお旅籠料といつては頂きませんホンのお志しで宜しうございます何うかお泊り遊ばしませ」一刀「老爺能くいふて呉れるが今晩は月を親ながらブラ〳〵……ふれは小金の原續きぢやナ」老「左様でございます」一刀行のぢや」老「うれはお癪なさいお兩人様お命が危でございます」一刀「ハヽア命が危い」一刀「何んぢや」老「もう此

節は悪い者が此原中に居りまするさうで今月になりましてから飛脚屋さんが三人又土浦の大家の番頭さんが一人、最う皆あで七人ばかり殺されましたる上金を奪れなどいたしましてイヤもう危険で昼中でも此の節は此處を通り人はございません位わゝお役人様方もお手をお入れ遊ばしたが壹の程は何處に隠れて居りまするか笹原の中にでも隠れて居るか知ません跡白浪といひまするから盗賊故に住ふ所が分ません、さういう危険な譯でございますから貴君方お兩人様をお泊申すのでございまして慾張まして私しがお泊りを願ふといふのぢやございません」聞しより神子上典膳が「ハヽアそれは先生尚ほ面白うございます何ぢや老爺それぢやア追剝か強盗の類ぢやナ」老「マア〳〵左様でございます」典「詰人助けの爲めあらば今晩乃公が通つて遣かに其のものを殺して呉やう」一刀「アヽ斯や〳〵典

膳亦始めつた能く命を落したがる奴、血氣に焦燥るは匹夫の勇止せ〳〵」典「デございますか」一刀「左樣ぢや」典「うれでは今晩此處に泊るのでございますか、併し先生百姓町人なら卒知らぬ先生と私しが兩人あれへ泊つたといへば若一刀術者が跡にてあれを聞きなば嘸ぞ柔弱と笑ひませう」一刀「アヽ笑ふものは笑へ阿呆者には勝ふふふよ」お笑ひ遊ばして　一刀「にらい話が面白うなつた最う一本酒の燗を漬けて呉れられ」所へ侍ひ兩人忙だゝしく駆け來りまして「老爺水を一杯呉れ」表をガラリ明けた最う夜も六ツ少々過き老爺は周章てゝ「ハイ何んでございます」侍「出會ッた〳〵」　老「お出會いなさいましたか」侍漸〳〵まア我々が冒人であつたからとれを受て逃げて來たか大變な奴だ」老「うれはお危のふございました併しお怪我がなくて結構でございますまア〳〵あういふ奴にはお勝ひなさらんが

宜しうございます、併し大層豪傑ださうでございますな」侍「どうして劍術の名人中々大兵肥滿にして一刀を取り其の者の曰く吾は只の物奪りばかりではない刀術を究めるには人を斬つて刀を試し腕を試さんければならんといはれたに因つて吾々が心得たりと受ければ宜いか何うして向ふの奴ひ捨だしく先人間とは思はれん位わな奴刀を取てイエと睨らまれた時に佐々木さんお前腰を抜かしたね」佐々木「實は猫者腰を抜して面目ない譯だ」と話をして居たのを傍で聽いた一刀齋「オイ典膳とはうれは弱々見逃せんぞ」と思はぬ聲を發した　典「エイ典膳とは先生其賊を御存んじか」一刀「ウム」頷に問ひ腹に答へた一刀齋今二人の侍ひが息急切つて逃げ來たり水を飲んでの語物り其の者は確に自分の弟子日外や不埒を働いて逃去り其の後逃んが小野善鬼に如違ひないとのお考へ二人の侍ひはうれとは知

や其の儘立場にて酒を飲み仮を食して其の夜の中に行て仕舞う」一刀「老爺」老「ハイ」一刀「今の侍ひは彼れは何所のものだ老「彼は土浦あたりの豪士の方々でございます皆剣術を修ひなさるお方ですが向が餘程強いと見へます」一刀「さうか宜し〳〵これでは其の者は俺と此弟子と所人で斬て仕舞はう」老爺は笑ひ出た「ゑれは〳〵御隠居様貴老はマア老人の冷水といふのは其ゑとお年を召てそんなゑとをなすッて若しお怪我があッたら……」一刀「イヤ〳〵苦うない此儘戻らゃは両人は切れたと思て呉ろ典膳速かに來れ」典「畏まつた此時神子上は未兄弟子の小野善鬼とは知ません」其所を出して一二町來と一刀「典膳よ其者ゑそ小野善鬼に相違なし」典「エヽ」一刀「イヤもう太抵今の話刀を以て搏へた時は一目見腰を抜ぴいふ彼の刀術は師たる景久でさへ及ぬ所一一二種ありアヽ情ないとだ、餘り術に長けたるがために遂には斯く悪事を働くか」典「併し先生仮令師匠の御命にても其の術に至つては兄を弟の身として斬れませうか」一刀「イヤ〳〵苦うない斬れ」典「ハッ……併し貴老と私しがうれへ參りなば先方で氣が附ませう」一刀「待て〳〵其方跡に戻つて彼の茶屋の老爺の軒下に懸けてあつた大きなる笠あの一蓋を借り來れ」典「畏まつた」と神子上が跡戻りをして老爺に頼み筒笠の大きいのを借受けて參りました、一刀齋先生ゑれを被り少しく衣類の若様を變へて」一刀「サア跡から其方來たれよかし」と先へ立たる大先生、跡には門人神子上典膳原を大凡そ小半道も來ると向ふには杉の森もあり、此方には生茂つて居る熊笹もあり、扨て小金原は中々廣い所、昔はゑれに馬が數多飼つてあつたといふ冬向になると雪の中で食す物がないと其馬は笹の葉を喰べたなどいふゑとも小金名覽といふ書にあ

ります、老人は先へ立つて行くと向ふの笹の茂り杉の木の陰から飛出して「待て」との一言、老人俯向いて「ハイ〳〵何事である」賊「手前がおれに居るのを知つて來たのか知らぬに來たのか唯だ金子を奪ふばかりにあらぬ覺に置きたる一刀流の腕試し汝が命を貰ふた覺悟しろ」一刀引拔いたる時一刀齋が跡に下つて一刀「善鬼……」との一言にハット驚き小野の善鬼はヒョイと見上げたる時、一刀齋の手にて笠をヒョイト取ると笠の紐と輪ばかり頭に殘つた」　一刀已れは〳〵」と仰せられ思はぬ涙を流したは小供の時より手元に置いて教へたる一刀流此者に讓つて己れは死しての後も一刀流を充分に殘し置かんと思ひしに此の通りの不行跡、思へば何んとなく胸一杯になんおすつた幾ら强膽な善鬼でも百姓老爺と思ひきや計らざりき伊藤一刀齋景久先生の前」　善鬼恐入つた」と兩手を突きお辭儀をいたす

其の時に先生は刀の柄に手を掛けエイとばかりに斬付けましたが此方はかしして逃出だし彼方の方へバラ〳〵」　一刀「ソレ、典膳斬れ、追へ」　典膳「まつた」といふやうなもの〻成るべくは兄弟のごとなれば見逃さんと、アイヤ善鬼殿の典膳でござる忠明でござる師匠の御勘氣を受けて居ながらあれを改めるお氣はないかソコ逃げ候へ」と追駈けさまにいふ弟々子に追駈けられても身に暗きあるがため振返り切り付ける術もなく彼に逃出す、一刀齋が「コリャ典膳汝も魔道に陷るか切れッ」との一言に既う仕方がない神子上は一刀を引拔き茲に小野善鬼を切るといふサテ爰が此の講談の三の切り鳥渡一服いたします

第十席

典膳は漸く善鬼に追ひ縋りましたが何分切り兼ねて居る一刀齋が「何故切らんか、汝切らねば此の老人が切るぞ、善鬼最早茲に

及んで汝卑劣なるとは致すまいな」善鬼は夢の覺めたる心地「善「アナ勿体なし師匠の御言葉幼少より致して師の御恩それを忘れて所もあらうに此の原にて强盜を働き此の場に及んで最早卑劣なるとは仕つらぬ典膳汝拙者を切れ、拙者よ代つて是れからは師へ對して忠孝を盡せサア切れ〳〵といふ一言、此の折神子上が改心いたした小野善鬼を切り棄ねて居る一刀齋も思はぬ涙を飜し「惡いことをする子程親は思ふといふ其の情愛は尤もなり併し善鬼よ汝改心なすと雖も最早汝の年にては劒道を以て世を送るゐとは叶はぬそれに此の原にて夜々人を殺したるゐと上役人にも知れ居れば遠からずして上の處刑を被むりて遂に刑場に於て首を曝されるよりは弟子神子上典膳が刀に掛つて死ねば冥土の迷ひもなく往生佛果を得らるゝより宜いかサア典膳此の刀にて切れ」と此時伊藤先生が渡したの

が前に申上げました即ち「瓶割刀」典「ハヽア委細承知仕まつる典「ゐれ善鬼殿御身を切つた其跡にて小野の家へ此神子上典膳が相繼ぎ申す」と受取つたる健に引抜いた瓶割刀此の時小野善鬼が首差延べて覺悟をして居るハッと切込む時ヒヨイと善鬼は体を替はしたバラ〳〵ッと二三間彼方の方へ逃げ行く樣子一刀齋が「ヤイ仕損つた不倒に心得たるが爲めに欺むかれしか典膳切り捨てイ」といふ一言、駈り込んだと思ひきやハッサリ善鬼の身体は腦上よりゐれを唐竹割といつて然るべく思はぬ神子上が勵へヨロ〳〵と下りヤッタリ尻餅を突きました、狡く申すと典膳柔弱なやうですが決してさうでない向ふは自分の兄弟子であるゐれを討つたからでございます一刀齋が止し留めを」と見ると既う留めには及ばん喉の下まで切下げました一刀齋が此の刀の用ひ方を見て大層感心なされた、大抵の者は

やッちまへハッと云様、酔で御るが典膳忠明は默つてパッサリと切つたあれからでございます一刀流には決して掛聲がない真影流には氣体剱といふのがあります、諸君此處を伺は能く眼を止めて御覽下さい決して講談師の嘘でない剱道の實際でございます、氣体剱といふのはうれは何ういふ理由かといふと掛聲と向うに身体を寄せるのと剱が向ふの身体に這入るのと合氣の三ッです、ヤー、パサリ、コイと切る、あれで氣体剱といふ、然るに一刀齋氏はまだあれまでのあとを餘り致しません、此の時始めて典膳が切つた刀が宜くてうれから一刀流あは決して掛聲がない掛聲を爲さゆして氣を呑んで向ふに行つてパサリと切るのでございます、剱術の講談をして一刀流の人がやッ、エイ、ホウと向ふを打つたあどゝいふのは大に相違いたして撃剱家の笑ふ所ださうでございます一刀流には掛聲はおきもの打つ

た後でお面なりお小手といふのがあれが當り前、うれでございますから典膳の悴か兩人ありましてうれより段々傳つて一刀流の方では氣体剱は用ひません、氣を發せゆ聲を發せずして向ふを打つもの、あれが一刀流のお話の大事な所でございます、實に此の時一刀齋が感心をしたそゝで典膳が以來人を打つときには決して聲を掛けなかつたさうでございます、扨て其中に捨置かれませんが爲めに取つて返して立場の老爺に話をして所役人へあれを訴へる夜が明けて捜使が來たる、此の善鬼といふものは今まで三四ケ月此の原にあつて人を殺しうれが爲めに往來人が難義をしたが爲め悉とく尊敬いたすあれより一刀齋は典膳を連れて伊豆へ一たび立歸ります、爰でまた一刀齋先生が上方へ登るなどゝいふ種々の話もありまするし、又宮本武藏が箱根三島の宿にて鋼蓋の立會ひ、あれも一刀齋などゝいふ人

があります、これらは皆拵へたものであります、併し此標題が瓶割典膳でございますから貞玉は典膳の傳記のみを申し上げます

これより一刀齋氏は諸國を遍歷いたして末に至つて相果てました所は何の書物を見ましても一刀齋の死す所詳らかならぬとしてありますけれども此の後美濃國安八の郡戸田采女正の御家來に古藤田勘解由左衛門俊直の家が殘つて居ります、これは戸田家に於て子孫代々續いて維新の後は如何なされたかうれまでは知りません、或る人の說には一刀齋と共に大垣に足を止めたと申す人もあります、先づ流祖祿などには今申し上げます通り死す處ろ詳びらかならぬ門下に神子上典膳、古藤田勘解由左衛門の兩人丈けが出て居ります、其の後大池源太左衛門といふ人は此の人北國の方へ參りまして越前の御家に仕へたなぞ

いふこともあります、これも詳らかでありません、うゐで一刀齋景久が神子上典膳に別れるときに」

一刀「此刀は既う此の方は老体のゆゑ故用ふるゐともなきを以て汝にこれを與へるぞ必ず一刀流は其方の子々孫々まで相傳へるやう致して呉やれ」

典膳「固より先生億万年の後までも此流は益す〳〵擴めまするやう仕つります」といふ此一言が子弟の別れと相成りました樣に神子上典膳はこれより段々年老けまするまで諸國を修業いたしまして終ひには江戸に這入ます、此時まで別に主取りを致しませんで武藏の國に居りまする中……其の折りは今と違ひましてまだ未開の時節でございますから動もすれば追剝又は强盜などが諸方を跋扈いたし其の上に何づれも豪勇豪傑と自ら稱へて居りまするものが人を切り物を奪ふといふことが始終でございました、これを神子上典膳が取鎭めやうといふの

で或は姿を變へ、又或ときはあれを探り出しまして、悉とく江戸近村の彼方此方の刀術者にして宜からぬ者どもを切殺したるあとおどが三十餘名もあつたと申すあとでございます、爰に徳川家に仕へ居りまする小幡景憲といふ人がございまして神子上典膳の餘多の惡漢を退治いたし、其の刀を研くといふあとを見出だしましてゐれより東照神君たる徳川家康公に上申に及びまするど固より徳川家の御先祖たる家康公に於かせられましては御名君で在らせられまするに由て小幡景憲の上申を御滿足に思召されまして、終に浪士の神子上典膳は東照宮御前へ召出されました、其の時お旗下大勢を相手に刀術の玄妙を御覽に入れましたるところ家康公に於かせられましては悉とく御喜び遊ばされ、此に於て徳川家の旗下と相成りまして三百石を玉はりました此の時神子上典膳は小野次郎右衛門と改名をし

たといふあとが或る書物にございますが、其の實説はまだ此の時は神子上典膳で居りましたさうでございます、爰で神子上典膳は充分に名を揚げまして、素と伊豆の國より出でまして恐れ多くも徳川の旗下になるといふのは實に劍道者の此の上もなき譽まれでございませう、然るに此の典膳に二人の子がありまして已れ老体となつて後に此のものにす、惣領を忠也と申しまして師匠一刀齋の跡といふものがあきがために伊藤の家を繼がせまして神子上を棄てゝ伊藤典膳となり、此の人も悉とく親より武術の玄妙を受け殊に惣領のよとでありますから瓶割刀を讓ゴられましてございます然かるに此の瓶割刀といふものは一文字ありといふ人がございます、此の二代目の典膳にも門下が夥たありまして其の中第一の弟子は鶴井平右衛門忠雄といつて忠の字を附けましたのは能

く〳〵見込んだ弟子でございませう後に此のもの自分の姓を遣かはして伊藤と相成ります、此の龜井なるものが一文字即はち瓶割刀を受けまして為れを先づ一刀齋第四世と申しまして清揚大君に仕かへまして御ざいます、是れ即はち一刀齋の蔭を以て斯くまでの出世をしたものでありませう、うゐで次男に忠常といふものがありました、此の者に小野の姓を繼がせました のは舊き年に小金原に於いて小野善鬼を切つたがために其の家が潰れるといふので肝賢な神子上を潰して師の伊藤の家と兄弟子の家を立てたといふのは寫に此の上もなき厚徳の厚き人でありまず、うゐで神子上典膳は八十一歳まで長命にて相果てました、うこで今申し上げました二代目の典膳は益々充分に藏を研かき舎弟とゝもに徳川に仕かへて悉とく忠勤をいたしました、尤も二代目の弟子は先づ第一に龜井忠雄でございい